

事は先き様にとつていゝ事ではありません。私はいたつて實際的な、平凡な女なのです。そして頭から、かうあるべきです、かうなさいといった風に押しつけられる態度が、とても我慢出来なかつたのです。先生の御高配に對して、こんな率直な言ひたい事を申し上げまして、嘸お腹立ちの事と存じますが、お許し下さいませ。伯母達は「お前は兩親がなく成長つたのだから、親だと思つて優しく仕へなさいと申しますが、いくら女の多い時節でも、さう自分を殺せるものぢやないと思ひます。かうした時局ですから、貧乏、不自由は覺悟致してをります。それにCさんは僕は生活が安定してゐるからと、いかにも特權でもあるやうに力説されましたが、私は女を心服させるものは必ずしも生活の安定ではないと思つてゐます。御自身の方の好條件ばかりをおなからべになつて、これを認めない女は大馬鹿だといはぬばかりの態度でありました。私も年ですから大概の事は我慢するつもりです。又随分無理な辛抱も境遇上忍んでまゐりましたから、忍耐といふ點でも人後に落ちないつもりではをりますが、Cさんの様に女を機械か玩具の様に心得てをられる人には、私はむかはないと思ひます。私ばかりではありません。大方の女性は精神的にも摺むものなしでは生きてゆかれないと信じます。御多忙な先生にくどくど申し上げまして御免下さいませ。

ませ。先生からC様へはよろしくお断り下さいますやうお願い申し上げます。私の申し上げました事に就て御注意下さいます事が御座いましたら、近々におうかどひ致しますから、御指導下さいませ。此の後ともよろしく願ひ申し上げます。」

以上はふみ子さんのお手紙の全部であります。

おば様のお手紙は簡單で、いろ／＼御配慮有難く、何分にも當人は年を取つてをりますので、私共の思ふやうにならず困つてゐる事、義理ある仲であるだけ無理強ひするやうに思はれても心苦しいなどしるされてありました。私は、それに對して早速返事を書きました。

「詳細なる御手紙拜見いたしました。C氏に對するあなたの觀察、洞察ともに鋭く感心いたしました。これ程深みのあるあなたが、今一步突き進んで考へて見ることは出来ませんか。あなたのおつしやつてゐられるやうなことは、失禮な申分ですが幼稚な我儘です。三十八歳の今日迄、あなたのおつしやるやうに一度の戀愛の經驗もなく、堅實一路を歩み續けて來た紳士、もうそれだけで充分満足すべきだと私は思ひます。C氏が青春の夢を捨てかねてゐるやうに、あなたにも幻に描いた理想の男性の影を追ふ癖があります。あなたははつきり意識されないやうですが、私から

申せばお互で五分と五分です。C氏は實に無邪氣な、そして潔い心の持主です。あなたのやさしいかしづきに依つて、二人とも幸福になれるやうに思はれますが、いかゞでせう。さうしたお氣持になれなければ致方ありませんが、今一度よく考へて御覽なさい。折角あつた御縁ですから、よく考へて下さう。」

この手紙を出してから、二三日経つて返事がまゐりました。それには先生の御忠告によつて、いろ／＼考へたこともありますから、C氏と暫く交際して見たいとのことでありました。私はC氏の方にその意向を傳へて遣りました。

二人は今交際中であります。

どうかお互のいゝ點を認めあつて、一日も早く結婚するやうに祈らすにはゐられません。

一四 種子を蒔く人の心構

「私は〇〇縣の青年團の指導員をしてゐる者ですが、此の度靖國神社の臨時大祭に参拜のため上京致しました。私は何時か折があつたら、東京市の結婚相談所でやつてをられるお仕事の内容や、學式の事に就いてお聞きして見たいと、兼々思つてをりましたので、序と申上げては甚だ失禮ですが、本日突然お訪ね申上げました次第です。」

「それはまあ、ようこそお出で下さいました。」

「新體制が出来まして、農村でも新しい國策に従つていろ／＼な舊い型が破られていきますが、この結婚の事となりますと依然として舊體制そのまゝで、一向に進歩改善しないのです。」

「文化の中心である都會でも、あなたのおつしやる通りの状態です。殊に地方はしきたりとか風習とか先祖代々やかましく、傳統的であるだけ改革といふ事は一層困難なことと思ひます。」

「これからの吾々若い者には、其れ等の無益な傳統を出来るだけ改革して、ものによつては全然破

壊してしまつて、國家の方針に歩調を合はせて行きたい覺悟なんです。その第一がこの結婚に関する一切の習慣なんです。多年東京市が實行てをられる機構とか、精神とかいつたものを詳しく説明して頂いて、我々の指導方針の参考にさせて頂きたいのです。」

「御質問下されば、何でもお話し申上げます。」

「こちらでは、どういふ方法で擧式を行はれますか。」

「非常に簡單なんです。式場は結婚相談所の二階にあります。二十疊程の廣間の明るい清淨な部屋で、正面に明治大帝の御尊影がかゝげられてあります。側には重大時局を物語る日の丸の國旗が白聖にびたりと張りつけられてあります。その眞下に金屏風一双と大きなテーブル、その上には白の三寶が載せられてあります。三寶には冷酒と土器、傍に島臺があり、たゞこれだけで、其の他には何の裝飾もほどこされてゐない簡素な西洋間であります。椅子は左右に二十程、行儀よく並べられてあります。次の間は家族の控室になつてゐまして、こゝには大きなオルガンが一臺置かれてあります。最初に先づ正面對つて右側に新婦、仲人、兩親、兄弟、親戚といふ順に着席して貰ひます。左側にもそれにならつて新郎、兩親、兄弟といふ順になつてゐます。他に相談所長がお

立會ひになりまして祝辭を述べて下さいます。他に相談所の方から式の進行を司つて下さる職員と、お盃をして下さる方と、オルガンをひいて下さる方等があります。式の次第を申上げませう。」

式 次 第

- 一、司會者、始式宣言
- 一、一同起立、宮城遙拜
- 一、國歌二唱
- 一、新郎、新婦氏名紹介
- 一、固メノ盃、高砂
- 一、誓言書朗讀（新郎朗讀ス）
- 一、新郎新婦、誓言書ニ署名
- 一、所長、誓言書ヲ新郎ニ渡ス
- 一、親戚ノ盃

一四 種子を蒔く人の心構

一、所長祝詞

一、式終了

「かういふ事になつて居ります。」

「ここに誓言書朗讀とありますが、これは各自に文案して來るのですか。」

「それは東京市で草案したものがありませんから、それも御覽に入れませう。」

誓言

吾等兩人茲ニ結婚ノ式ヲ舉グ、今日ヨリ異體同心相助ケ相補ヒ不變ノ信賴ト、悠久ノ敬愛トヲ以テ終生ヲ俱ニセントス、斯クシテ吾等ハ内夫婦ノ本分ヲ守リ、外國家ノ進展ヲ圖リ、以テ私人トシ公人トシテ其ノ責務ヲ全フセンコトヲ期ス、右良心ニ從ヒ天地神明ニ誓約ス。

昭和 年 月 日

加藤 國太郎

花岡 きみ子

誓言書に、新郎新婦の順に右のやうに署名されます。これを所長は、この佳日を永久に記念するため、更めて新郎に渡されます。それから双方のは親戚代表の方の盃事がありますが、これは場合によつてお略しになる方もあります。これが終ると所長が、一生記念になるやうなお諭しと、恩情溢るゝ祝辭とを述べて下さいます。御参考迄に所長の祝辭の一例を申上げて見ませう。

祝 辭

今日、この佳き日に當りまして○○、○○御兩家の御結婚式を首尾よく御舉行になりましたことは、誠にお目出度いことでありまして、私共一同心からお慶び申上げ、御兩家並びに御夫婦の御幸福をお祈り申上るものでございます。殊に御婚儀に就て、當結婚相談所の新しい様式をお選びになりましたことは、この新體制下、誠に時宜に適したお計らひと深く敬意を表します。

結婚は人と人との交渉の中で、一番深い意義を有するものでありまして、其れに依つて男子も女子も新しい人生へと發足するのであります。この發足を有意義なものと致します爲には、只今お讀みになりました御誓言にある通り、不變の信賴と悠久の敬愛とを以て御夫婦の本分を守られ、

よき御家庭をお築き上げになることが大切であります。これがお二人の御幸福、御一家の繁榮の基となるのみならず、延いては國家に對する奉公の道ともなるのでございます。

善き結婚に依つて作られたる家庭の内こそ、老人は扶養され、子女は教育され、男子は外に向つての活動力を増し、女子は家政の上に十分なる技能を發揮することになります。斯くして家庭は現在にあつては國力の發展に貢獻し、將來に於ては人口の増殖の上に重大なる役割を持つのであります。

さういわけですから御結婚なさいましたお二人は、能く御自分達の使命を御認識になりまして、模範的な御家庭を御建設になりますやうお願いいたします。

なほ御夫婦の間の圓滿をおはかりになりますと同時に、お家に對する責任、長上に對する務めをよくお守り頂きたいと存じます。お二人が今日このやうに御立派な成人となられ、このやうな御良縁を得られましたことは、自分達の力のみではなく、偏へに親御様や御親戚の御恩澤によるものが多いのですから、若い御夫婦はよく長上を敬ひ、孝養をお盡し下さるやうに願ひます。また御老人方も若い方々を温い心でお導き下され、御一家協力の下に御家運を起し、又御子孫の繁

榮を圖り、以て大東亞建設の國策に順應して頂きたいと、切にお祈りする次第でございます。

「成程、これは誠に時代に即應した、大そう御立派な方法です。吾々も大いに學ばなければならぬと感じました。それからこれ等の舉式に要する費用はどの程度ですか。」

「男子の袴・羽織はお貸し出来ます。又女子の方は留袖・裾模様之二枚重ね、式用丸帯・帶揚・帶留・しごき一切揃つてをります。クリーニング代として實費壹圓納めて貰ひます。それから式場費として參圓、全部で四圓です。たゞ今お酒が手に入りませんので、これは新郎側から一合程持つて来て貰ひます。舉式は日曜・祭日以外の日で、朝九時から午後四時迄の間でしたら、何時でもよい事になつてゐます。」

「これはこゝの相談所の手で成立した人以外でも差支へないのですか。」

「どなたでも東京市民でさへあれば結構です。」

「よく解りました。式の後で披露とか、親族紹介とかいつた事は出来ませんかですか。」

「出来ます。舉式後別室で、一人前五十錢程度(茶菓)の極く質素な披露です。その時各自が立つて自己紹介をして下さればよろしいのです。御希望でしたら記念撮影も出来ます。前もつておつ

しやつて頂けば、當日寫眞屋が来て待つてゐます。女子の方も化粧・着附・結髪等を極くおやすく特約してゐる美容師があります。電話で交渉して置けばちやんと出張して來ます。」

「それから、いろいろお聞き致しますが、結納金といふやうなものは、どの位の額になつてをりますか。」

「それはいろいろ家庭の状況、生活の程度等で一概には申上げ兼ねますが、こちらでお勧めしてゐる結納金は、俸給生活者で百圓以内、工員さんで五拾圓以内となつてゐます。百圓に對しては五拾圓のおかへし、五拾圓ではお返しなしといふ風になつてゐます。」

「序に伺ひますが、東京市へ申込みますのに、申込金といつたものは何程ですか。」

「無料です。」

「結婚成立した場合は。」

「矢張り無料です。」

「全部無料では、様子見に申込むとか、ひやかしに申込むやうな者がありはしませんでせうか。」

「一人もありません。なにしろこれだけ種々な重要書類（身分證明書・戸籍謄本その他を示す）

を提出して、自身出頭しなければ申込みを受附けないのですから、眞剣な人ばかりです。」

「左様ですか。申込書に虚偽を書く人はありませんか。」

「女子には滅多に有りませんが、どうかすると男子には有ります。」

「それは主に、どういふ點を偽るのでせうか。」

「私の知つてゐる範圍ではそんな人は滅多にありませんが、一二件こんながありました。それは再婚の男子が初婚と書いたのと、内縁關係にある女を養母と書いた人、亡兄の未亡人と夫婦生活をしてゐながら、初婚と書いた人等がありました。かうした人達は役所の仕事を冒瀆したばかりでなく、お相手があつた場合、相手方が徹底的に調査しますから、所謂暗闇の耻が、明るみへ暴露されたといふ結果に終つて、一向に談が進みません。さうなると申込者本人も、役所へ來にくくなつて自然姿を見せなくなつてしまひます。」

「敗徳者は何處にも居りますね。」

「それ程でもないのですが、白々地さまに言つてしまつたら、到底縁談はないだらうと思ひ込んでゐるのです。けれども包み隠すからこそ縁はないのです。人間である以上何一つ缺點のない、

完全無缺な人のあらふ筈はないのですから、隠さず正直に、それこそありのまゝに言つて下さる方が縁はあります。」

「さうです。人間はそれ程の悪人もあまりゐない代り、完全に近い善人もさう澤山はゐないと思ひます。その證據には、大概の善行美談や悪徳行爲を聞かされても左程驚きません。」

「何處でもさうでせうが、特に相談所では身元が明朗確實でないと、全然未知の人同志だけに談が進行しません。選擇はお互の自由で、こゝには所謂仲人口なんていふものは少しもないのですから、比較的間違ひは尠いのです。」

「あまり自由過ぎて、男女とも言ひたい事を言つて、つまり我儘勝手に流れて纏りがつかないといふやうな事はありませんか。」

「大いにあります。求める事が眞剣で一生懸命であるだけ、自分も求められる人間であるといふ事を忘れてゐる人が多いのです。近頃のやうに不足してゐる物資を大勢の人が吾れ先に得ようとして、押合ひ、壓合ひするやうに、いゝ人を、いゝ方をと求める事にばかり夢中で、自分を反省する事が尠いやうです。」

「お互が慾張つて、理想の高い事ばかり言ひ張るのでせう。」

「さうです。お互が自分より總べての點で數倍上の人でないと満足しません。如何に實力があつても小學校きり出ない男子で、高女卒業の娘さんを求める事、極端に脊の低い男子が、脊の高い女子を、顔や身體に缺點のある方が並み以上に、完全無缺な人と言ふのは困難な事です。人は誰でも無意識の中に、自分の缺點や不完全なところを補はふとする意志が動いてゐます。自分がないものを相手に要求することは、少しでもいゝ子孫を残したいといふ本能なんですから、あながち無理な事とは思ひませんが、實際問題となると、なかくむづかしいのです。」

「それでは話の纏りやうがないでせう。」

「でも頭から、さうした觀念を打碎さうとかゝつても駄目です。さうした人は當所へ通つてゐる中に徐々に覺つて來ます。それまで待つといふよりは自然に待たされます。そして始めて丁度いゝお相手が出来るのです。」

「うかがへば何ふ程お骨の折れるお仕事ですなあ。其の代り成立した場合のお喜びも大したものせうとお察し致します。」

「いろんな意味で、大變骨の折れた人の談が纏まつて、結婚式後二人揃つて挨拶に來られたりすると、思はず嬉し涙がこぼれます。心から二人の爲めに多幸な將來を祈らずにはゐられません。」

「事務的な仕事でないだけに、自然人情がうつつてしまふのですね。」

「親心なんて申し上げますと大袈裟ですが、何時とはなしに親の様な氣持になつてしまふのです。」

「實にいゝお話を伺はせて頂きまして有難う御座いました。大へん参考になりました。早速國へ歸りましたら年寄りにも若い人達にも話して、學ばせて貰ひます。東京市の結婚相談所のために、若い青年男女の幸福のために切に先生の御健康を祈ります。」

「有難う存じます。どうか貴方様にも、御上京の折はお立寄り下さいまして、農村の御様子などもお聞かせ下さい。」

見るからに頼もしい氣なこの青年と、再會をかたく約束して別れました。

かうして、東京市が企圖し、田中當所長が長い間骨身を削る思ひでもり立てて來られたこの相談事業の組織と精神とが、今や全國都々浦々にまで擴まつて行く事は、時代の要求とはいへ誠に喜ばしい極みと申さねばなりません。

一五 幸運は心掛一つで

しとくと小雨を降る初秋、何時になく私の部屋は淋しく、御相談の人も少いので、書棚の整理など始めてゐるところへ、五十前後の商人風の男が、ガチャンと喫驚するほど大きな音をたててドアを閉めて遣入つて來ました。

私が立つて迎へますと、男は間が悪るさうに頭をかいて、

「思ひきつて飛込みやした。」

「まるで川へでも飛込んだやうですね。」

その男の様子があんまりおかしかつたので、つい私迄釣込まれて笑つてしまいました。あたりに人氣のないのを見すまして、安心したらしく、私がすゝめた椅子に腰を下しました。

「一寸お尋ねに出やしたが、結婚相談所つてどんなことをして下さる所ですか。」

「結婚に關係したことは何でも御相談します。」

「媒介とか、おとりもちとかいつたことはいかどせう。」

「いたします。あなたのおつしやるやうな、おとりもちなんていふ言葉は使ひませんで、御紹介と申してゐます。」

「その御紹介のことをお願いに出やした。全く恥を忍んで來やした。」

「何も恥なことありませんよ。お役所の仕事ですもの、むしろ名譽なことです。」

男はやつと安心したらしく、私が出した規則書を、老眼鏡の下から讀んでゐました。

拜見してよく解りやした。戸籍謄本・身分證明書・履歴書・寫眞、これだけ持つて來なくちや相談にのつては下さらないんですか。」

「さうです、ちゃんと役所の規則を守つて下さい。それから申込書を差上げます。」

「その申込書は家へ持つていつて、悴にでも書かせてはどんなもんでせう。」

「御自分のことですから、これもなるべく自身で書いて頂くことになつてゐるんです。」

「どうも困りやしたなあ、あきめくらですから、面倒なことは書けませんや。」

「誰にでも書ける程度のことです。」

「成程、それから此の身分證明書といふのはどんな物でせう。」

「兵役の關係とか、罰金以上の刑に處せられた事がないとか、破産の宣告を受けた事がないとか、さういふ事を市町村長が證明したものです。」

「難しいもんですなあ、そんな面倒な手續が必要ですか。」

「此所は全然未知の人同志が、人生の重大事を取扱ふ所なんです。ですからさうした重要書類がないと、どんな人間かわからないでせう。」

「さうおつしやれば其の通りですが、わしや、そんな大それた、御法に觸れる様な悪い人間ではありやせん。今でこそ東京さ出て、八百屋稼業はしてやすが、これでも生れ故郷の茨城の實家は、中流以上の百姓で、今もつて兄貴が親爺の後を繼いで盛んにやつてやす。不審だと思つたら一應調査して下さい。身分證明書だなんて、盗人やどろばうちやあるめえし、申上げるも憚様ですが先祖代々系圖も立派で、人様に後指さされる様な家柄ではありやせんから。」

いかにも實直さうな此の男は、身分證明書をどうかん違ひしたか、大層憤慨したらしく、顔色を變へて私に申しました。私は強ひて優しく、

「役所の仕事ですから、出来るだけ慎重に丁寧に、間違ひの無い様にかうした重要書類を提出して貰ふ事になつてゐます。」

「ちや誰彼の區別なく、此所へ申込みに来る人は女でも出すのですかね。」

「女にも出して頂きます。つまり此所では、お互に未知の人同志の寄合なのです。最初から深く理解し合ふには、先づかうした書類に依つて、追々に信じていくより仕方がないのです。あなたにしろ、全然知らない人が結婚の相手としてひよつこり現れても、何處の何者か、親兄弟も知りたいでせうし、身分や身元だつて出来るだけ詳細に知りたいたいと思ふでせう。それが人情です。ですから申込書は明瞭に正直に、ちよつとの間違ひもない様に記入して貰ふことになつてゐます。」

「申込書類が實際と違つてゐたり、嘘偽の事書く人などありませんか。」

「滅多にありませんが、どうかすると有ります。さういふ背徳行爲をする人は、お相手が出来た場合、相手方が充分身元調査を致しますから、すつかり解つて了ひます。」

「こちらでは調査はなさいませんか。」

「調査は各々でして貰ひます。出来るだけ綿密に、後になつて問題の起らないやうに。」

「成程な、よく解りやした。」

男は漸く納得して、顔面神経の緊張をほぐし、にこ／＼笑ひ出しました。

「それから、いろいろお聞きしては御面倒でせうが、この履歴書といふのは、どんな事書くんでせうか。」

「卒業した學校、それから業務ですね。何月何月に何會社に入社して、何課の何係といふ風に詳しく書いて下さる。」

「わしの様な高等小學きり出ない者でも要りますかね、それにわしや勤人ちや御座いやせん。商人で八百屋稼業を致してゐやす。書立てる様な事は何一つ持つてゐない人間ですが。」

「その通り、現在のまゝをお書き下されば結構です。」

「それから寫眞、これは規定がありますか。」

「一年以内にお撮りになつたものでしたらよろしいです。別に規定はありません。」

「この履歴書は悴にでも代筆させてはいかゞでせうか。どうも恥をかく事知つても、字を書く事は知らない無學者で。」

「どんなでも御自身で書いて下さる。」

「こんな難しい面倒な手續して、果して嫁に来るつて女有りやせうか。」

「それは前以てお約束出来兼ねます。所謂御縁ですから。」

「それでは一つ、わしの希望を詳細お話し致しやすから、お聞き取り下さつて明瞭おつしやつて下さい。お前みてえな野郎の相手はねえならねえと、さうすりや何もわざわざ恥かきに申込みやせんから。」

「あなたはよく恥々とおつしやいますが、こちらへ申込むことは、ちつとも恥かしいことではありませんよ。むしろ名譽なことです、役所で奥様を探して頂けるなんて。忙しいと伺つてゐる隙がないのですが、幸ひ他にお待ちの方もいらつしやいせんから。」

「あんまり時間潰させ申しては済みやせんから、手つ取早く、概略を申し上げます。最前も一寸申しあげやした通り、わしは茨城縣〇〇近在の農家の三男に生れやして、兵隊検査過ぎる迄親爺や兄貴達と、實家でせつせと働いてゐやしたが、何時迄親の側にゐても結局兄貴が相續人であつてみれば、遅かれ早かれわしは養子にでもやられるか、よくいつて少しばかりの田畑分配貰つて分

家させられる位が關の山だ。養子にいくのも業腹だ。田畑分けて貰つたところで知れたもんだ。かう氣がついたら、一日も早く獨立の道たてねえちや嘘だと思つて、二十三の暮、親爺から貳百兩の現金貰つて東京さ出て來やした。」

「その時は奥様はなかつたのですか。」

「ありやせんとも。申し遅れやしたが、わしや今年五十になりました。家内には三年前に死に別れやして、三人の子供がありやす。長男は二十四歳、長女は二十二歳でこれはこの暮に嫁にやる事に決定つてゐます。次ぎも女の子で、これは十四で高等二年生です。話は前に戻りやすが、わしの村から出て來て今から三十五年程前から〇〇の新開町に八百屋の見世出して、今では電話まで持つて立派にやつてゐる人がありやす。わしや始め其の人頼つて出て來て、二三ヶ月見世の手傳ひさせて貰つてゐる中に、商賣のこつも呑込めやしたので、古荷車一臺買つて、先づ引八百屋から始め、三四年辛抱する中に得意も出來、少々の資本も出來たので、〇〇町の通りに小さな八百屋の見世を出したのが今から二十何年の昔でやす。間もなく國元から女房貰ひ、小僧の二三人も置ける身分となつて、今では家作も裏に三軒持つて月々百圓の家賃が上りやす。これで女房さへ生きてゐ

て呉れたら申分なかつたのですが、さんざ苦勞させて、やつと活動の一つも見せてやられる様な身分になつたところで、女房は死んでしまひやした。可哀さうなやつで……」

「なくなつた奥様は、いゝ方だつたんでせうね。」

「死んだ女房褒めるぢやありませんが、よく働く女で、お客様大事お見世大事で、とうとう伊勢詣いせもぎ一つしなひやしたよ。早く子供にも別れるせいか、恐ろしく可愛がりやして、叱しかるつて事がないのです。子供達もおふくろの事は今もつて夢にも忘れやしやせん。懇意な人達や、古くからのお得意様が、いゝ人世話するから貰へ〜と勤めて下さいやしたが、佛ほとけに濟たすまない様な義理が悪い様な氣がして、随分不自由を我慢して通して來やした。しかしこゝへ來て長女は嫁にやらなきやならず、長男は何時召集おめしが來ないとも限らないし、十四の女の子だつて母親なしでは仕込むにも躰しっぺるにもどうにも法がつかませんや。おまけに國家は非常時、何時頭の上に焼夷彈せういだんや爆彈ばくだんが落つちて來ないものでもない世の中に、夫婦揃つて苦勞しなきや立派な御奉公も出來ねえと氣がつかやして、悴せにも娘にも相談したところ、子供等もよく理解りかいつてくれやしたので、お恥かしいのもわすれお継つぎりに來やした。年甲斐としあひもねえと笑はずにお世話願ひやす。たゞ子供達に内證ないしやうで、親

の權利振りまはして來たと思はれては困りやすから、書類が出來て申込書書きに來る時は、悴せと一緒にまゐりやす。その時は何分よろしく願ひ申上げやす。」

こんな事があつてから十日ばかり過ぎた或日、二十四五歳の體格のいゝ、いかにも眞面目まじめさうな若者と一緒にこの男が一切の提出書類を整へて、私の部屋を再び訪ねて來ました。

「先日は誠に有難う御座いやした。これはその折お話し申上げやした悴せで御座いやす。」

「おや〜本當にお連れになつたんですか、結構ですね。お父様には奥様ですが、あなたに取つてはお母様ですから。」

「わしもさう思ひやして、厭いやだと申しやしたが無理に連れてまゐりやした。」

「お年はおいくつですか。」

「二十四です。」

「お父さんとお見世の方をやつていらつしやるんですか。」

「軍事工場へ通つてゐましたが、小僧が徵用令で實家へ歸りましたので、止むなく工場を止して見世を手傳つてゐます。私も何時召集が來てもあわてないやうに覺悟してゐます。」

「それでは、お妹さんはお嫁にいらつしやる。あなたも出征といふ事になると、お父様と小さなお妹さんでは御心配ですね。」

「いろく親子で相談の結果、お母さんを買つたらといふ事になりましたとお願ひに出たんです。「本當に珍しい、何といふ美しい事せう。お母さんになる方も皆さんのやうな心がけのよい方ですと、安心していらつしやれますね。」

「まあ私はどうでも、多少の不足は我慢しやすから、子供が見立つて、これならお母さんと言はれると思へば、決して異存は御座いやせん。」

「いゝ心がけのお父さんですね、どうかすると世間には自分の奥様だから、自分一人が氣に入ればいゝと言つて、子供や周囲の思惑などを、一向考慮に入れない人が多いのですよ。」

「お父さんは頑固な所もありますが、死んだ母親にもやさしかつたし、とても子供煩悩な人ですから、年寄つてあんまり不自由な思ひはさせたくないと思ひます。氣立の素直な、人情深い人を探して頂きたいと思ひます。」

「大きなお子様のある所へいかふといふ様な人は、餘程の苦勞人か、心掛のよい人ですね。それ

にあなたの方の場合、先のお母様がお父様によくお盡しになり、お子様にも大層慈愛深い温順な方のやうでしたが、そのお母様と比較なすつたり、對照なすつたりするとなかくありませんよ。」

「それはもう、本木に優る末木なしで、子供ともよく覺悟定めて参りやしたんでやす。」

「よくお解りですから、精々お探し致しませう。」

「もし御縁があつて見合ひさせて頂くやうな場合は、私よりは先きに子供達と會見せて下さつて、子供達が「お母さん」と言はれる様ななら私にだつて女房といはれねえ筈はなからうと思ひやす。男なんて者は、貰はねえ先は、あゝでもねえ、かうでもねえと七面倒な事を述べ立てやすが、貰つてしまへば痘も笑醫、少々ぐらゐ鼻の穴が天井向いてゐても、商賣屋の女房には愛嬌があつていゝ位のところですよ、まつたくの話が。わし等位苦勞してわし等位の年輩になりやすと、學問はなくても年の功が物言つて、滅多に間違ひはないつもりです。子供は御覽の通りの親孝行者、家作もあるし見世の上金で喰ふ飲むに不自由はありやせんから、生活の苦勞はありやしやせん。」

「よく解りましたが、どうもお勤人にいきたいといふ人が多数で、御商家でもいゝといふ人は實に尠いのです。」

「成程なあ、わしに言はせりや女は矢張り虚榮だ。商賣屋は働きも激しいし骨も折れやすよ。勤人の女房の様に朝早く亭主役所さ送出してしまひば、一日籠ぶら下げて、魚屋の軒先さ突立つて行列したり、お菓子屋の前さ行列つくつて二三時間もあんけらかんとしてや暮していけませんからねえ。實際の話がお内儀さんと言はれるより、奥様と呼ばれたい。股引ばきよりや、月賦で作つた洋服でも洋服着た人がいゝと思つてゐるんですね。新體制でも女の心掛はちつとも昔と變りませんや。さういふ心得違ひの女連をどしどし説諭してやつたらどんなもんでせう。」

「説諭なんて事になりますと、警察のお仕事みたいになります。私共も出来るだけは、商賣や職業によつて、無暗に毛嫌をしない様に申してゐます。しかし世間一般がまだく認識致しませんで困つてゐます。」

申込書を差上げると、悴さんと相談しながら、長い事かゝつて漸く書き終りました。一應篤と拜見しますと、たどくしい字ながら、正直に素直に思ふ事が書かれてありました。

「これでよろしう御座います。」

「不躰ですが、手数料とか、申込金とか、何程差上げたらよろしいでせうか。」

「そんなものは何にも入りません。」

「全然無料ですか。」

「さうです。」

「それは又結構過ぎて、勿體ない事ですなあ。わしの様な割鍋でも、お見計ひでよい鹽梅などち蓋がありやしたら、どうかお世話願ひやす。いよいよ式を挙げましたら、謝禮とか寄附金とか致しますんでせうな。」

「そんな御心配もいりません。」

「流石はお役所のお仕事だ。市民は大助かりしやすなあ。無料でお取扱ひ下さるからと云つて、眞逆ひやかしゃ、胡魔化して申込む様な不心得者はないでせうね。」

「滅多そんな不謹慎な人は有りません。これだけ重要書類を出すのですから、みんな眞剣で来る人達です。」

「それ聞いて安心しやした。家内が亡くなつてから四十九日も過ぎない中から、随分懇意な人や、お得意先きの旦那衆から、いゝ人世話するから貰へくとすゝめられやしたが、昔から一口に仲

人口といふ位で、その口先に引掛つて失敗した仲間の話も聞いてゐやすので、どうも恐ろしいが先に立つて話に乗れなかつたのです。」

「あなたの様に、さう一概にきめてしまつてもいけないでせう。中には眞實に御親切で世話なされる人もありますから。」

「さういふ人は滅多有りませんや。先づ話が持ち上つてから出来上る迄には相當な日數がかかるものと見て差支へないでせう。その間でそれ仲人さんが来た。お茶やお菓子だ、食事時なら蕎麥取れすし取れ、何時もく〜てんや、もんで失禮だ。今日はさしみて御飯差上るといつた調子で、吾々の様な貧乏人には大層な物入りだ。いよく出来上つてからの禮金も、これ又少々では済まされな。小ちやな身代棒に振らなきや女房貰へねえ事になつてしまふ。其上、仲人親として一生息の根の通つてゐる間は、盆暮の挨拶、生死のお交際は申す迄もなく、悪いとかれこれ言はれ、良ければよいで俺が世話だと威張られる。わし等國では、實の親より仲人親には頭が上らねえものとされてゐやす。」

「役所では、そんな仲人口なんでものは少しもありません。選ぶ人も、選ばれる人も自由です。」

私共はお勧めは致しません。出来るだけ申込者の希望に適つた人を物色して差上げてゐます。その間で私共は、御縁に障る様な點を發見したら、遠慮なく御注意申上げて改めて頂きます。あなたが最前おつしやつた様に、この非常時にふさはしくない、氣儘をいふ人や、個人主義な考を持つ人、つまり、新體制の線に添はない障礙物は總べて取除くやうにしてゐます。自分は少しも反省しないで、矢鱈にお相手の缺點を探し出して問題にしたり、容貌も體格も年齢も完全な人と慾張つた事をいつたりする人、かうした人によい縁は恵まれません。世の中にそんなに整つた満點の人があらうとは思はれませんから。人の慾望には限りがありません。よく所長さんが私共相談員におつしやる言葉に、足る事を知つて、與へられたものに満足する人には、もつとく〜いゝ方を、其れ以上の方を探して上げたい。己を反省みて他人を責めない人には、缺點の尠いよい人と思ふのは人情だと申されますが、實に眞理だと思ひます。申込者にかうした心掛の人がふえて來たら、結婚難も餘程緩和されると思ひます。」

「大變いゝ話を聞かせて下さいやして、わし等の様な無學な者にもよく理解りやした。忤も連れて來ていゝ事しやした。これも兵隊から歸つたら早速お願ひに出やす。」

この正直な男には申込むと間もなく、殆ど希望に近い人が見つかりました。世の荒海と戦つて来た、そして人情に厚い四十二歳の方と結婚いたしました。この方は再婚ではありませんでしたが、先夫との間に子供がなく、先夫は世にも珍らしい懶惰者で、女房を働かして自分は毎日ぶらりく遊んで暮してゐたといふ男でありました。生れつき善良なこの女は、人を怨まず、運命を呪はず、悪心も起さず、墮落もせず、たゞ一筋にまつすぐな道を歩き續けて来た人でありました。二年前その夫と死別したのでしたが、二十年に近い艱難辛苦が報いられて、律義でしかも働き者のこの男に懇望されたのでした。

「お子様が三人もあつて、あなたも大變でせうが、御辛抱なさいませ。」と私が慰めますと、女は打消して、

「どういたしまして。産みの苦しみもせず、養育の骨も折らずに、こんな立派な子供達の母親となれたのですもの、有難くて胸がいばいです。」

満ちたりた感謝の涙に濡れた女の顔は、神々しいまでに美しい光を放ちました。

一六 子を持つて、母強し

乳呑兒は出ない母の乳房にじれて、烈しく泣き出しました。

母親のお絹さんは、そつと起きなほつて、添寝してゐる赤ん坊をよしくと賺しながら、ねんねこでおんぶしてしまひました。そして格子を開けて外へ出ました。内の中で泣きたてられては他の子供達が眼を覺してしまひますから。十月の末とは思はれない寒む風が吹いて、心細さが一層身にしみました。

「可哀想に泣くんぢやない。御近所迷惑だから泣かないでね。」

けれどもおなかのすいて寝られない赤ん坊に、母の言葉のわかる道理がありません。ますます烈しく泣きたてます。

「可哀想な坊や、そして可哀想な母ちゃん。」

思はず一人言を言つて、ぼろく〜と涙をこぼしてしまひました。親も子も泣きながら、郊外の

とある裏町、人通りのない夜更の街をあちこちしてゐる中に、赤ん坊は泣きつかれて、いつか背中で眠つてしまいました。すやくとかな寝息をたてて。平和な息吹、それは力の足りない、貧乏な母親を責める音ではなく、精一ばいの母の慈愛に満足しきつた、感謝のかすかな響きそのものでありました。

「すまない坊や、かんにんしてね。」

赤ん坊のやはらかい肌の温味が、薄い着物をとほして、母親の身内に深々と染み入ります。

「すまない。こんな可愛い坊やを人様にやらうなんて考へた母ちゃん、かんにんしてね。」

無心な我が子に詫びながら、又しても明日のお米に心配しなければならぬお絹さんの境遇で、ありました。

大して暮しに困らない商家に生れ、兄と姉との三人兄妹の末つ子で、両親も子煩悩のお人よしでしたので、この家へ嫁いでくる迄は世の荒浪を知らずに過ぐして來ました。〇〇家の人となりこの十四年間、それはお絹さんにとつて、決して幸福な生活であつたとは申されませんでした。良人は或る小さな会社に正直に眞面目に勤めてゐる善良な人でありました。けれども姑は世間で

評判の氣むづかしやで、お絹さんは随分泣かされました。けれども生れつき素直なお絹さんは、人が感心する程まめしくこの姑に仕へたのでした。姑はお絹さんが嫁入ると間もなく中氣になり、二年餘りお絹さんの親切な看護をうけて亡くなつたのでした。やつと重荷を下したと思ふ間もなく、次々と生れた四人の子供、不足がちの俸給の中から、夫に心配をかけぬやう子供等に榮養を攝らすこと、是はなか／＼容易な仕事ではありませんでした。幸ひ里の両親や兄弟達が同情して、よく面倒見てくれたので、出来ない辛抱も續けられましたが、悲しい事にはその父にも母にも次々と死に別れ、さう／＼兄弟の親切にも甘へられなくなつて來たのです。

そこへ又お絹さんを途方に暮れさせるやうな、悲しい災難が湧き起りました。

「どうも近頃疲れて困る。」

「少し會社をお休みなさい。そしてゆつくり静養して下さい。」

「今、會社は忙しくて、二人前の働きをしても足りない時なんだから、休むわけに行かないよ。」
「でも體には代へられませんよ。」

夫はかうしたやさしいお絹さんの心配を押し出動してゐるうちに、とう／＼發熱して會社を

休むやうになつてしまひました。日常からぎりぎり一ぱいの暮し、一銭の貯蓄もない家庭で、夫の長の缺勤に俸給は半減され、いよ／＼生活難が深刻化して行きます。お絹さんの必死の努力の效もなく、夫の病氣は悪化する一方です。肋膜炎といふ悪い名前の病で、誰に聞いても長びく病氣と言はれ、お絹さんは心も狂ふばかりでした。どうかして病院に入りたいと、いろ／＼と出来ないのであるが女の細腕で奔走もして見ましたが、一日五圓といふ入院費の出道がありません。餘儀なく自宅で療養してゐましたが、それでも一日一圓はかゝります。貧苦にやつれ果てた體を引きずつてのお金の工面、無理に無理を重ねてのお絹さんの心盡しのかひもなく、この善良な夫はとうとうお絹さんに感謝しながら、いとしい妻子の上を氣遣ひながら、最後の息を引取りました。會社からの弔慰金、同僚からの香奠でかたばかりの葬儀も済ませました。いろ／＼滞つてゐた諸拂ひをすませても、尙數ヶ月溜つてゐた家賃をどうすることも出来ません。家主の情で四十九日のすむ迄置いて貰ふことになりました。後から後からと追ひかけられる生活苦と、子供の面倒で夫に別れた悲しみに浸つてゐる隙もありません。何といふむごたらしい、お絹さんの境涯でありましたでせう。

ぐつすり寝入つた赤ん坊をおぶつて、お絹さんは悲しい思ひ出にふけりながらさまようてゐましたが、やがて夜更けの寒さに、若しも坊やに風邪でも引かせてはと氣付くと、お絹さんは急いで家の中へ這入りました。

十二になる長女と六つの次女とは同じ床に眠つてゐます。八つになつた長男は寢床から轉げ出して、疊の上で正體なくねこけてゐます。お絹さんは一瞬苦勞も忘れて長男を抱き上げ、頬摺りしながらやつと蒲團の中に入れてやりました。そしてつく／＼と子供達の寢顔を見比べました。「これだもの、母ちゃんが附いてゐても一晩に何回となく轉げ出して困るのに、子を産んだことない姉さんにこの面倒が見られるかしら。」

ふと、嫁いでこのかた一人も子供を産んでみない、姉の言葉を思ひ出しました。

「お前一人に苦勞させては可哀想だ。大事な長男だから貰ふとは言はないから、まあ小學校出る迄私が育ててやるから安心しておよこし。」

姉は心からかう言つてくれたのですが、産んだことも育てたこともない姉に、この厄介が出る来るかしらと思ふと、心配でとても手離せない。六つの次女も他に貰ひたいといふ人があるが、

この子は気が弱くて泣き蟲だから、親や姉弟に別れたら、どんなに心細がつて悲しむかしれない。それに體質もお父さん似でよく風を引く子だから、もしものことでもあると私も諦めきれないし、死んだ夫にも申譯ない。これは私の手元を離せない。赤ん坊は餘計不憫ではなせない。生れ落ちるから父親に死に別れ、母親に生き別れ、姉兄にも別れ……そんなむごたらしいこと思ふさへ悲しいことだ。誰一人遣る子はない。みんなみんな私の血肉を分けた大事な子供なんだから、親子揃つて餓死するとも離せない、離れられない。

「お父ちゃん、どうかく私達をしつかり護つて下さい。私に勇氣をつけて下さい。」

お絹さんは、暗い次ぎの間に電燈をつけると、生きてゐる人にも言ふやうに、かう言つて夫の位牌に合掌しました。そして亡夫の戒名を口の中でくり返し、残された者への加護を祈りました。かうしてゐるうちにお絹さんの心の中には、はつきりと、死なば諸共と覺悟がつかしました。

四十九日もまたたく間に過ぎてしまひました。お絹さんは家主との約束を守り、住みなれた、そして懐しの夫が最後の息を引取つた思ひ出の家を引拂つて、六疊一間のせまくるしい棟割長屋へ移つたのであります。

それからのお絹さんは、毎日赤ん坊をおぶつて方々の家庭に手傳として雇はれて歩きました。國民學校五年生の長女に、食事の仕度や買物をまかせて、自分は朝早くから夜おそくまで、働き續けたのであります。かうしてもなほか細い女の腕で四人の子供を養ふといふことは容易なことではありません。殊に近頃のやうに買物に不自由になつては、一滴の醤油、一しやじの鹽すらない日があります。引移つたばかりで近所隣りともお馴染が薄く、いくら困るからといつて、お米一合の融通をつけてくれる人もありません。親子は空腹をかゝへて、寝られぬ夜な夜なを明かすことも珍しくはありませんでした。いよくその年も押しつまつて、子供等には楽しいお正月の休みとありませんでしたが、悪いことには、長男が學校から持つて歸つた悪性の麻疹に、次女も赤ん坊も感染してしまひました。狭苦しい六疊の部屋に、三人の子供は枕を並べて寝込んでしまひました。お絹さんが渾身の母性愛をふりしぼつても、今度ばかりはどうにも手の下しやうもありません。お絹さんは氣も狂ひさうでした。

其處へ突然訪れたのは、元住んでゐた近所の人で、長女と同級生の子のお母さんでした。

「まあ山村さん、しばらく。」

一六 子を持つて、母強し

「まあおかみさん、お恥かしい。よくお解りになりましたね。」

「きくながら、やつと尋ねてましたよ。どうしてゐなされるか一度訪ねて、お子さん達のことも氣にかゝつてゐましたので……」

「それはまあ有難う御座いました。お宅の娘さんもお達者ですか。」

「あれはね、君子ちゃん(長女の名)とお別れしてがっかりしてゐましたよ、譯があつて今家にはゐませんのよ。」

「どうなさいました。」

「實はね、山村さんも御存じでせう。私の妹が埼玉の〇〇町で藝者屋をしてゐるのを。」

「そんなこと伺つたことありませんね。」

「あの妹が國子(娘の名)をみつちり仕込んで見たいから任してと、疾うから私にせがんで居たんですよ。私も考へちやゐたんですが、藝事は當人が好きでないと、可哀想ですからね。ところが本人が埼玉のおばさんの子になると言つてきかないのですよ。どうせ女の子だ。嫁にやると思つて遣つちまへといふことに相談纏つて、暮に埼玉へやつてしまつたんですよ。今ね、一生懸命

踊りと三味線を習つてゐますよ。來春から、お雛妓で出すといつて妹は意氣込んでゐますよ。あんな鼻べちやさんでも、その道は恐ろしいもの、すつかり綺麗になつて、偶に私が訪ねて行くと、

「お母さんこんちわあ」なんておませさんになつて、こつちが面喰ひましたよ。」

「まあさうですか、では藝者さんになさるんですか。」

「山村さん喫驚して、どうせあんた私達の子が、大臣の奥様になれつこなしさ。さうかと言つて學問仕込める道理はなし、そんなら藝者にでもして置けば、又花の咲くこともありまさあね。だから、山村さんあんたも、生真面目に苦勞してないでさ、お君ちゃんを私の妹に任せるつもりはない。どうお、私は今日それも相談する積りで、やつとの思ひで探して來たのよ。」

「まあ、さういふ話しにお出で下さいましたの。」

「そればかりぢやないのよ。そんなに氣にしちや厭よ。」

「私は御覽の通り、今地獄の苦しみをしていますが、娘をそんな……、まだ考へたこともありませんでした。」

「だから、あんたは苦勞してゐるくせに世間が狭いといふのよ。こんな大勢の病人を抱へてさ、

一體どうするつもり。君ちゃんを下地子に出す覚悟さへつけば、私は今すぐでも〇〇の金を耳を揃へて出させて見せますよ。今いゝ子がなくて困つてゐるんだから、お宅の君ちゃんなら器量はいゝし、聲はいゝし、おまけに柄だつて大きいから、年よりや大きく見えませね、ほんとに三拍子も四拍子も揃つてゐるんだもの。」

「そんなに褒めて頂いても、あの世界はまた別ですから。私共のやうな子供では……」

「そんな心配御無用だよ。君ちゃんのやうなお利口さん、ちきその道の骨を呑み込んで、いゝねえさんになつてしまふよ。」

「さうでせうかしら。」

「さうなりやいゝ且那もつくし、あんただつて樂が出来るといふもの。第一この急場をどうにか切抜けなくちや、可愛い子供達を見殺しぢやないかね。お前さんの決心一つで、いゝお医者様にも診て貰へるし、滋養物だつて買つてやれるといふもの。ねえ山村さん、思案してゐる場合と場合が違ふよ。」

お絹さんは頭が混亂して、喉がつかまつて咄差に返事も出来ませんでした。醫者、藥、養生物、

こんなものがぐるぐる頭の中をかけ巡ります。その様子を見てとつたおかみさんは、懐の中から眞新しい拾圓札を一枚出してお絹さんの前に置きました。

「お菓子の代り。今買はふにも何にもなくてね、病人になにか買つて遣つて頂戴。」

「とんでもない、こんなに澤山なもの……。」

「まあいゝぢやないの、折角出したもの取つて置いてよ。」

お絹さんは辭退しながらも、おかみさんのすゝめ上手にうか／＼と貰つてしまひました。おかみさんはいろ／＼親切な言葉を殘して歸つて行きました。

おかみさんの歸つた後で、お絹さんは夢からでも覺めたやうに、そつとその拾圓札を手に取つて見ました。これがあれば君子の滞納の月謝も拂つてやれるし、近くの小兒科のお医者さんに診て貰ふことも出来る。さうだ、あんなに親切に言つてくれたおかみさんの好意、濟まないことながら一遍だけあまへることにしよう。この決心つけて、お絹さんは紙に匂んでそのお札を夫の佛壇に供へました。そこへ君子が學校から歸つて來ました。その清らかな娘の顔を見ると、何となく氣が咎めて、じつとしてはゐられませんでした。

「どうしたの母ちゃん」と君子にあやしまれる程、お絹さんはそはくしだしました。

「ねえ君ちゃん、今日、元居た家の側の國子ちゃんのおばさんが尋ねて来て下すつたのよ。」
「珍しいわね、こんな貧乏なうちに。」

「あのおばさんいゝ人よ。」

「さうかしら。」

「どうして君ちゃん、そんないひ方するの。」

「悪いけど、私あのおばさんも國子ちゃんも、あんまり好きでないの。」

「おや、どうして。」

「氣が合はないのね。國子ちゃんはおしやれよ。そしてあのおばさん私にとつても厭なこと言つたことあるから。」

「どん厭なこと。」

「恥しくていひないわ、母ちゃん聞いちやいやよ。」

「あの國子ちゃんね、藝者さんになるんだつて。」

「矢張り眞實だつたのね。あのおばさん私にも藝者になれつていつたのよ。いゝ着物も着られるし、どんな贅澤でも出来るつて。」

「それで君ちゃん何て言つたの。」

「いやだから、いやだつてはつきり断つたわ。」

「さう。」

「いけないの。」

「むゝ、いゝのよ、それでいゝのよ、君ちゃんよく断つたわね。母ちゃんは馬鹿だなあ。」

「どうして。」

「いゝのいゝの、君ちゃんいらえのよ。」

「母ちゃん變ね。」

「君ちゃんは、こんな馬鹿な母ちゃんの子にして置くの惜しいわね。」

「母ちゃん馬鹿ぢやないよ。今日受持ちの先生がね、一寸いらつしやいつておつしやつたから、何だと思つて職員室へ行つたのよ。」

「さうしたら。」

「さうしたら、山村さんのお母さんは感心な人だつてほめて下さつたのよ。そしてね、母ちゃんにこの手紙持つて〇〇區の方面館にいらつしやいつて。さうすると月謝も學用品もみんなたゞで頂けるやうにして下さるつて。」

「さう君ちゃん、そんな有難いことなの、よかつたね。人様のお情けに縋ることはいゝことぢやないけれど、今の場合仕方がないものね。」

「いゝよ母ちゃん、あたゝい級長でせう。だからいろく先生のお手傳して御恩がへしするから。坊やも一年の二組ちや一番出来るんだから、母ちゃんそんなに小さくならなくてもいゝよ。」

お絹さんはこく笑ひながら、嬉し涙をこぼしてゐます。娘には氣取られぬやう、そつと佛壇の拾圓札を懐中に入れました。そして翌日朝早く近所の郵便局から、書留にしてお國さんの家へかへして遣りました。

うるさく脱きすゝめるおかみさんを、きつぱり斷つたお絹さん一家は、しばらく苦しい生活が續きましたが、天道人を殺さず。お絹さん一家にも温い太陽の光がさしそめました。學校の

先生からの紹介で、始めて知つた方面委員さんの親切に、一家は蘇生しました。次女と赤ん坊は市の託兒所へ、長女と長男は學校へ、そして身輕になつたお絹さんは、大きな軍需工場の食堂で働くことになりました。

お絹さんの忠實な働きぶりを見て、感心しない者はありません。上の人からも下の人からも、お絹さん、食堂のおばさんといつて、親しまれ、重寶がられました。結構親子の食べるぐらゐのものは、食堂のあまつたもので間に合ひました。お絹さんはことく感謝して骨身を惜しまず働き續けました。

お絹さんの母性愛は、あらゆる苦難を悉く征服してしまひました。

この實話を私に聞かせて下さつた方面委員さんは、

「大勢の子供があつたり、生活苦から逃れたいが爲に再婚したいといふやうな、氣の弱い女があつたら、どうかこのお絹さんの話をして聞かせて遣つて下さい。」

「いゝお話を伺ひまして、私にも大變参考になりました。こんな心掛けのいゝ人ですから、貰ひたいといふ人もあつたでせう。」

「ありましたとも、面倒見たいと申込んだ人が二三人ありました。」

「それをどうしました。」

「御親切は有難いが、それでは佛に申譯ないといふのです。いゝ子供だから貰ひたいといふ人があつても、亡夫が最後の息を引取る時、子供のことは頼む頼むといつてゆきましたので、差上げでは佛に申譯ないと、一も佛、二も佛ですから誰も手が出せませんよ。」

世にも幸福なお絹さんの亡夫「〇〇居士」、幽冥界を隔つれど、どんなにか喜んで成佛してゐられることであらませう。

一七 努力を忘れた妻の悲哀

逞しい體格をした、十七八の青年に連れられて、顔立のととのつた色青さめた女が、私の前に腰を掛けました。

「どんな御用ですか。」

私が尋ねると、その女の人は突然泣き出しました。青年は焦躁しさうに舌打ちして、私の方に向つて申しました。

「僕のお母さんなんです。」

「大層お若いお母さんで、わかりませんでした。」

「お母さんは十八でお嫁に来て、十九の時僕が生れたんです。」

「さうですか、私は最初お姉様かと思ひました。それにしては、あなたは丸々肥つてがっちりしていらつしやるのに、お母様は顔の色も悪いし、御病人かとも思ひました。」

するとそのお母さんは、私の言葉を遮るやうに、

「いゝえ、私は決して病人ではありません。」

「それは失禮いたしました。」

「私は夫の道楽のために、日夜苦しんでゐますが、病人ではありません。」

「僕も病氣なら諦めます。お母さんは一寸した心の變へやうで、そんなに苦しみますにすむと思ふんです。」

「お前さん達のことを案ずるからこそ、こんなに心配するんです。」

「僕達の爲になら結構ですから、心配して貰はなくしていゝと斷つてゐるぢやありませんか。」

「お前は男だからいゝだらうが、妹達はどうします。妹は女ですよ。女の子はどうします。」

「妹達だつて僕とおなじ心です。」

「どんな心。」

「お母さんにもつと落著いて、家にゐて貰ひたいと思ふ心ですよ。」

「お父さんが落著かせてくれないんです。どうすればいゝんです。」

「さう昂奮こうふんなさらしないで、私が少しでもお役に立つたら、まあ御相談させよう。」

「僕耻かしいから歸る。」

「お前まで、お母さんを捨てるんだね。いゝよ、お母さんも覺悟はとうにしてゐるんだから。たゞお前達が不憫なばかりに。」

「僕達なんか、ちつとも不憫がつてくれなくていゝと言つてゐるんです。」

私は息子さん方に靜かに尋ねました。

「ぢやあなたにうかゞひませう。お父様どうなすつたんです。」

「お父さんはいゝ人なんです。けれども仕事の都合で、今母と別居してゐます。そして他に父のことを世話してゐるお婆さんがゐます。」

「そのお婆さんで、どんな方なんです。」

「父の遠縁にあたる人で、夫や子供に死別した氣の毒な人なんです。年も父より一つ二つ上なんです。母なんか足元へも寄れないやうな、しつかりした人物で、父の仕事になくてならない顧問役をしてゐます。父は工場の近くに家を新築してやつて、其處で工場の職工や、女工達の監督を

したり、いろ／＼な重要な仕事をしてゐます。父は決算期のやうな、忙がしい時は、よくそこへ泊つて來ます。それを母は猜疑の目で見るとやうになつたんです。そこには他に人もゐますし、又その人は決して父を誘惑したり、唆かしたりするやうな悪人ではないんです。それを母はいつとはなしに怪しいと思ふやうになつてしまつたんです。」

「成程ね、よくわかりました。」

「お母さんが、やかましく騒ぎ立てるので、父は近頃ではだん／＼家へ歸らなくなつてしまひました。」

「あんまり騒がれますと、男は五月蠅くなつて、仕事にも差支へますからね。」

「父も母には手を焼いてゐます。始めは何ともなかつたものが、本物になつてしまつたんです。」

「お父様にも不注意の點もあつたでせうが、お母様がそこまで追込んだやうにも思はれます。」

「お母さんさへ、しつかりと今少し寛大な氣持でゐたら、父は事業家ですから、もつともつと仕事をします。」

「お父様はどんなお仕事をしていらつしやいますか。」

「〇〇縣の〇〇町に軍事工場を持つてゐて、分部品ですが、重要な物を製造してゐます。」

「それなら、餘計お母様の御理解が必要です。いつそ皆さんで工場の近くにおすまひになつてはどうです。」

「僕もそれが賛成なんです、父は工場町だから妹達の學校のためにも、又僕の學校とも大變遠くなるから、自分一人不便を我慢すればいゝと言つて、遠い所から通つてゐたのです。」

「さうしたお父様の、家族の方々への思ひやりの氣持など、よく考へないと、お父様を失望させてしまひますね。」

「母は五人兄弟の末子に生れて、我儘に育てられたんです。母の兩親は我まゝ娘だから普通の家庭では納まらないと思つて、姑小舅もゐない父のところへくれたんださうです。」

「お父様とは、お年も相當お違ひになるんでせう。」

「十五も違ひます。」

「あんまりお年も違ひ過ぎますね。」

「おばあさん達は、年の違つた人なら、母をよく面倒みてくれると思つたんでせう。」

「きつとさうお思ひになつたことでせうね。」

「實際母は僕と姉弟と間違へられます。だから僕はお母さんと一緒に歩くのは大嫌いです。」

「ほんとにあなたは、丸々太つて骨組みもしつかりして、お父様似でいらつしやいますか。」

「父は太つて體も大きく、度胸もすわつてゐます。反對にお母さんは氣が小さくて、我儘で、世間知らずときてゐますから、父の困るのはよく解つてゐます。ですから僕を信じてゐなさいといふんです。妹達もよく勉強してお母さんに心配かけません。僕だつて一生懸命學生らしく勉強したいんです。けれどもお母さんが年中くよく／＼して、泣いたり、怨んだり、お父さんの後をつけて歩いたり、ちつとも家庭に落着かないもんですから、自然僕達兄妹も落ちつけないで、そは／＼してゐます。だん／＼成績も悪くなる一方です。僕はもうどうなつてもいゝから、妹達をこんな悲しい家庭から救つてやりたいと思ひます。」

「そんなあなた迄、自暴自棄な氣持になつては困ります。お父様のところへ行つて、今あなたが私におつしやつた通りおつしやいなさい。これはどこまでも、あなたとお妹様の熱誠に依つて、お父様を家庭に連れ戻すよりほかに仕方ありません。」

「僕も今まで度々さうしたんです。けれどもお母さんがちつとも心を改めないから、何時とはなしに父の足が家に向かなくなりませう。時には僕だつて厭になつてしまつて、友達の家泊めて貰つたこともあります。」

漸く泣き止んだ母親は、又烈しくしゃくり上げながら申しました。

「どうせお母さんは馬鹿で、氣が小さくて、お父さんやお前の手古摺者てこずりものですよ。お母さん一人がゐなくなればいゝんでせう……。」

「又はじまつた。僕耻かしくてたままないや。歸ろ。」

「お母様は少し御病氣のやうです。あんまり逆さかふやうなことおつしやらない方がいゝでせう。」

「さう思つて、僕も我慢してゐます。妹達がとても心配して、かはいさうです。僕が一生懸命お母さんを引留めてゐないと、死ぬの生きるのと言つて飛出します。妹達は本氣にして泣いて騒ぎます。さうなると僕の家はまるで地獄の一丁目になつてしまつて、近所にもみつともなくなつてゐられないんです。」

「ちやあなたは間斷なく、お母様の護衛をしてゐなければならぬわけですね。」

「毎日お母さんについてゐます。」

「学校は。」

「今試験中ですが、休んでゐます。」

「それはお氣の毒ですね。何とかありませんか。御親戚の方でもありませんの、お母様の方の。」

「少しはありますが、もう誰も寄りつかなくなりました。」

「女中さんもゐないんですね。」

「來てもすぐ行つてしまひます。呆れかへつて出ていきます。」

「それではお父様に歸つて頂くより外ありませんね。」

しをれてゐたお母様は、別人のやうに生き々々として、私の方に向き直つて言ひました。

「今度は私もきつと心を改めます。」

「さうなさいませ。さうでないとな大事な大事なお子様をだいなしにしてしまつた上に、家庭まで破壊してしまひますよ。」

「よくわかりました。子供に申譯ないと思ふのですが……」

「今迄あなたはあんまり幸福過ぎて、夫の苦勞も子供の苦勞も、金錢の苦勞もなさらなかつたら、天がもつとく立派ないゝ奥様になさるため、あなたには一寸難かしいお仕事をお與へになつたと私は思ひます。どんな弱い母親にでも、子供の爲には強くなれます。奇蹟的な力がいくらでも湧いて來ます。變なことを申上げるやうですが、觀音經の中に、觀音妙智の力といふ有難いお言葉が御座います。努力すれば、どんなお母様にでも妙智の力が出て、一切の苦惱から救はれると思ひます。あなたのやうに努力もしないで、御主人ばかり責めるのはよくないと思ひます。夫の愛に馴れきつてしまつて、不斷につとめる、仕へるといふ氣持を失つたら、妻は夫から置き去られます。私は夫婦の愛情は、地球の引力のやうなものだと思ひます。一生油断なく、お互がひつぱり合つてゐないと、雙方とも不仕合せになると思ひます。あなたはこんないゝ息子さんを持つて、世にも幸福な方です。學校まで休んであなたに間違ひのないやうに着いて歩いていらつしやる。お可哀さうぢやないですか。お母様らしく、しつかりお子様を落着かせて勉強させてお上げなさい。世間には御主人の収入が尠くて生活に苦しんでゐる妻もあり、子供が不良で泣いてゐる人もあります。自分の足元許り見てゐないで、時には少し世間を見廻して御覽なさい。」

「有難う御座いました。」

「お母様もよくおわかりのやうですから、あなたは、一日も早くお父様に歸つて頂くやうに骨を折つて下さい。」

「お母さんさへその氣持になれば、僕はお父さんの首に繩をつけても連れて來ます。」

「さうして下さいね。あなたも安心して勉強出来るし、妹さん達もどんなに喜ぶことでせう。お母様もよくおわかりですね。」

「わかりました。」

「又氣が變つちや僕いやだよ。」

「變りやしないよ。」

「そんなこと言つて行くせに、お父さんの顔を見ると、直ぐめそ／＼始めるんだから。」

「もう此所でこんな堅くお約束したんですから、安心してお父様に歸つてお貰ひなさい。」
涙をふいた母親の顔には、ほんのり赤みがさして、物腰も靜かになつてきました。

聽て親孝行なこの息子さんは、母親の手を引くやうにして歸つて行きました。

一八 新聞記者との一問一答

「どうです。大東亞共榮圈、人口政策確立と、政府ではしきりに早婚を奨励してゐますが、申込者にどう影響してゐます。」

「男女共に、大層年の若い方の申込が増えてきました。殊に男子に多いやうです。」

「男子はいくつ位が多いですか。」

「私のところでは二十六七歳です。」

「女子の方は。」

「二十四五歳でせう。」

「平均した年齢ですか。」

「さうです。」

「ぢや年の點で、組合せが困難ぢやありませんか。」

「さういふことになります。つまり男子が要求する年齢の女子が尠いことになります。」

「女子の結婚期が遅れた原因はいろいろありませうが、主な點は。」

「大きな原因はやはり經濟問題だと思ひます。男子側から申しますと、妻子を養つてゆくに足るだけの収入になつてから結婚したい。それ迄は自由な天地で、大いに青春を享樂しようといつた考へなども手傳つて急がないのです。一方女子の方でも、生活の安定しない男子と結婚して、經濟的な苦勞をする程なら、好きな職業に就いて、嫁入仕度でも買込んだり、稽古ことでもしようといふのです。今一つは、家の手助けでもしてゐるうちに、うか／＼と婚期が過ぎてしまつて、はつと氣がついた時は、取りかへしのつかないことになつてゐたといふ人も多いやうです。」

「その他に、女があんまり高等教育をうけたため、理想が高くなつたといふやうなことはありませんか。」

「それも大いにあります。教育が普及されたおかげで、女子も文化の程度が進み、配偶者の選擇も複雑になつたと申されませう。たゞ両親や親類から勧められたのでは満足出来ない。自分にかと確信がつかないと結婚しようとしません。趣味も豊富で、あまりかけ離れた人とは一生家庭

生活を営むに足らないときめてゐます。教養の程度が低くかつたり、體格が悪るかつたり、家庭が混雜してゐたり、年齢の差が甚だしかつたりした場合、多くの女子は男子を敬遠してしまひます。人物本位といふことは、いふべくしてなかく行はれないやうです。」

「さういふ自由主義や、個人主義的な結婚の選擇法は、大いに排撃されなければならない時代ではないですか。」

「さうなんです、他のことと違つて一生のことだといふので、随分解つた人でも結婚のことになると個人主義になるやうです。一家の幸福、娘の幸福を希ふあまり、止むを得ないことにも考へますが、それなら、それが個人々々の幸福を増進させたかといふと、決してさうでなかつたと言へませう。男女共晩婚になつて、いよ／＼結婚難を深からしめた事になつてしまひました。」

「男女ともに、もつと國策の精神に添はなくてはいけないといふことですか。」

「さうです。結婚に限らず、いかなることでも、その時代々々によつて國策の示す所に順應する事は、國民の絶對的な使命であります。今度新しく結婚相談をおはじめになつた、軍關係の〇〇病院の幹部の方が見學にお出でになりました、此方のやうに此の方はどうでせう、いけませんか、

さうですかなんて、そんな手緩いことでは駄目です。もつと義務的な観念を植えつけないといかん。今に結婚も配給にするかも知れんと、笑つていらつしやいました。」

「お婿さん、お嫁さんの配給、いゝですなあ。」

「田中所長は、現在の様な非常時にあつては銃後の務めとして、結婚は大切な公事であると申されてゐます。結婚の公事であるといふことは、日と共に益々痛感せられて來ました。男女結合の最大目的は、健全な子孫の繁榮といふことにあるのですから、無責任に結婚を延ばして晩婚におちり、國家の進展を阻むといふことは、日本國民として申譯のないことと存じます。」

「さうした見地から、政府でも人口問題と共に、大いに早婚の奨励をしてゐるやうですね。いくら早く早くといはれても、十八や十九ぢやどうせう。」

「十八でも十九でも發育のいゝ女子は、結婚出來ないことはないでせう。けれども十代で女が結婚生活に這入ることはどんなものでせう。例へ生理的には母胎としての機能もそなはり、母となれないことはないと思ひますが、人妻として、子の母としての資格が十分だとは申されません。女學校教育を終つたばかりの娘は、まだ乳臭ささのぬけきらない子供ですから、一躍人妻として、別

な世界に入り、子供の母として、よく實社會の荒浪を乗りきつて行く力がありませんか。子女を保育し、思想的にも正しく教導して行く力があるかどうか、甚だあぶなかしいものと思ひます。體の準備と共に、心の準備も出來てゐないと思ふのです。」

「政府では女二十一歳、男二十五歳を標準としてゐるやうですね。」

「さうです。その位の年齢に達しますと、女も女學校を出て二三年経ちますから、その間に世間に接する機会もあり、又家庭でお母様から裁縫・家事・家政等もみっちり仕込んで頂いて、多少心の用意も調つて來ます。併し縁といふものは、すぐ探してもすぐ有るものではありません。心掛のいゝお母様は、娘さんが女學校を出る頃から、そろ／＼心がけます。二十一歳を標準にしても、けつこう二十三四になつてしまひます。女二十三、男二十八ぐらゐまでは婚期だと私は思ひます。遅くも女二十五、男三十迄には結婚を完了するやうにして頂きたいと思ひます。」

「例外として、女教員だとか、女醫だとかいふ人の結婚はどうでせう。矢張り年齢が問題になりますか。」

「多少問題になります。國民學校の先生方などは立派な國民教育のために婚期が遅れたのですか

ら、何とか男子側で理解してくれるかと思ひます。又女醫さんのやうな方は、時局柄、大變お國の發展のために努力して、男子の片腕となつて働いてゐて下さるのですから、大いにその功績を認めて、進んで結婚の相手として選んで頂きたいと思ひます。」

「併し實際問題となると、さういふ職業を持つた婦人は、男子側であまり歓迎しないのぢやありませんか。」

「さうした傾向があつて困ります。何となく窮屈きうくつなんでせう。かつて社會的な事業にたづさはつた経験の有る人は、家庭に入つてからも、しつかりした自信をもつてゐます。ですからよく夫を内助し、子女の教育の上にも十分効果をあげることは當然であります。」

「それを認めないのは、男子の我儘、利己主義といふことになりませんか。」

「さうです。かうした點は、男子側に大いに反省して貰はないと困ります。現在國家は女子と言へども、一藝一能ある者は一人残らず、國家に奉仕することを奨励してゐます。一國の文化が男子の手によつてのみ建設されるより、婦人の協力に依つて、より一層完全なものとなることは論をまたないこととせう。」

「なる程、さうなると難かしくなりますな。」

「職業を持つた女が、あまり男子側からよろこばれないといふことは、他に原因もありますが、國家といふ大きな建前からは、もつと男子側の認識を深めないと思ひます。國家は働け働けと勧めます。しかし男子は働く婦人は厭だといふ。これでは全く困るぢやありませんか。」

「矛盾しますな。」

「尤も長く職業に就いた婦人は、出産率もすくないといはれてゐますから、私は男子の理解によつて、働きながら結婚生活を續けられないことはないと思ひます。現に私のところで纏つた人で、これは音楽の先生ですが、二人共職業をそのまま生かして、立派にいゝ家庭生活を續けてゐます。今一人は御主人が軍の重要な仕事をしてゐる人ですが、奥さんがその片腕となつて、完全に片棒を擔いでゐる人もあります。これ等には私共も常に感心してゐます。」

「いや、お忙しい時間を長いこと有難う御座いました。」

「どう致しまして、失禮いたしました。」

其處へ年の若い、うつくしい娘さんが、お母さんに連れられて這入つて來ました。

「どうぞせう。一つ撮らせてくれませんか。」

「お困りのやうだから、お止しなさい。」

「いゝえ、後向きならかまひません。」

「いやあ、お母様話せますね。では後向きで結構です。」

〇〇新聞記者は、美しい親娘の姿をカメラに納めて歸つて行きました。

一九 愛に満てる有職婦人の新家庭

〇〇大学の商科を卒業されて、ある大会社の庶務課に勤務するTさんは、今年三十二歳の温厚な紳士です。

この方にK子さんといふ二十三のお嬢さんを御紹介する事になりました。

Tさんはお父様が亡くなられて、開業醫のお兄さんとお母様と何不自由なく、至極平和に暮してゐる可愛らしいお嬢さんです。

御紹介の當日は、お母様とお兄さんが付添つてお出でになりました。その日は御紹介が三組もあつて非常に混雑いたしました。二時間程経つて、K子さんのお兄さんが、私の部屋へおいでになり「今日は先生も大變御多忙なやうですから、このまゝ歸りまして、今日御紹介を頂きました結果を尙よく皆と相談の上、御返事にうかがひます。」
「わざわざお出で下さらなくも、お手紙で結構です。」

兄さんとお母様とに連れられて、K子さんが歸りますと、入道ひにTさんが遣入つて來まして、いづれ手紙で詳細く申し上げますといつてかへりました。

二三日経つてK子さんのお母様が、御相談の結果を報告にいらつしやいました。

「先日は有難う存じました。本日は誠に伺ひ難いのですが、そんなこと申してゐる場合ではありませんので、實は娘の申しますのに、大層おやさしさうなお方様ですが、何となく気がすゝまないと申します。別に理由はないのですが、お年も違ひ過ぎるせいかな。」

「しつくりしないとおつしやるんですか。」

「どうもさうらしいのです。悴などはそんな我儘をいはせないで、親切なやさしい人であつたらいいではないかと申しますが。」

「Tさんは極く温厚な方ですから、お嬢さんのやうなしつかりした、進取の氣性に富んだ方がいゝとおつしやつてゐるのです。」

「御先方様からは、何とか御返事が御座いましたでせうか。」

「まだです。」

「かうした時代ですから、大概ならいゝと私も思ひますが、どうも本人がうんと申しません。多少の危険はあつても、氣魄のある、將來大いに發展する方がいゝと申すのです。」

「ですから、お嬢さんの力でうんと出世させて上げるんですよ。その位の覺悟はどなたにでも必要ですね。」

「娘はどちらかと申しますと、實際的な、意志の強い方の人間ですから、Tさんのやうな空想家と申上げては失禮ですが、文學的な方とは肌が合はないかと思ひますが。」

「肌が合ふ合はないなんて、いつてゐる時代ではないと思ひます。さうかといつて無理にお勧めは出來ませんから致方ありませんね。」

かうしてK子さんのお母様とお別れした翌日、Tさんからの手紙を受取りました。

「いつも御多忙な中から、御配慮にあづかりまして感謝のことばもあります。」

先般K子様といふ美しいお嬢様に、お目にかゝる機會をお與へ下さいまして有難う存じました。K子様は先生のおつしやるとほり非常に理智的な、てきばきしたお嬢様のやうでした。時々僕をじつと御覽になられましたその目が、一寸僕には強く痛いやうにさへ感じられました。二十三歳と

いへばまだく夢の多い時代ではないでせうか。僕のやうな結婚適齢期を過ぎた、所謂結婚難に苦しんでゐる男の相手としては、勿體ない方のやうにも見受けられました。物質的にも恵まれて、女學校も大層いゝところを出られ、お裁縫・お花・ピアノと種々なお稽古も積まれ、どんな立派な男性の求婚にも應じられる數々の優れた資格のあるお嬢様で、假りに来て頂けたとしても、それはあまりにも悲しい幻滅げんめつであらうと思ひます。經驗に富んだ先生の御紹介ながら、僕は御遠慮申上げるより外ありません。現在の僕としてあの方を満足させてあげる何の持ちあはせも有りません。たゞこれだけは、はつきり申し上げます。もし先方様にも異存がなく、来て下さる意志がありましたら、僕の出来る最上の努力をK子さんに捧げることを。もし先方から御返事が御座いまして、幸ひ御希望にかなひましたらよろしくお願ひ申し上げます。」

私は三十二歳になつた今日、なほおぼつちやんの香の失せきらない、戀愛の夢やまぼろしを追つてゐるTさんに、K子さんからの返事を手紙で知らせてあげるに忍しのびず、そのまゝ四五日経過しました。

それから私はTさんに、適當な人を物色して、K子さんから受けた失望を取もどして上げたいと思ひました。丁度お年は二十八ですが女學校を出るとすぐ職業について、ある會社の社長の秘書のやうな仕事をしてゐた、世の中の裏も表も知つて苦勞はしたが、品性は墮落たふささなかつたといふ物解りのいゝ、しんみりした方の書類を御覽に入れ、再相談しました。

Tさんは今少し年の若い人といつてみましたし、出来れば職業婦人でない人とも言ひましたが、私はあなたには年齢よりも、職業の有無よりも、あなたのその年齢よりも無邪氣な、純眞じゆんしんな性格をよく理解して呉れる方がいゝやうに思ふと申しますと、「さう無制限に希望條件を下げる事は出来ない」と、不満さうでした。それで、又もつと年の若い良家のお嬢様を紹介致しました。すると私が先方の親御さんと相談してゐる中に自分の方から、その相手方のお嬢さんに手紙で辭退してしまひました。

「突然手紙など差上げて、嘸なほおさげすみの事と存じますが、お許し下さい。」

僕は木村先生から、あなたのお書類を見せて貰ひまして、はじめて貴女を知りました者です。僕はよそながら貴女のお宅も拜見して來ました。到底あなたを貰ふ資格のない人間である事も感得して歸りました。そんなら、何にも今日不躰な手紙など差上げて、あなたを吃驚びっくりりさせるには

及ばないではないかと、お叱りを受けさうですが、お許し下さい。可愛らしい！愛くるしい雛鳥のやうなお嬢さん！私は結婚のお相手としてあなたを見せて頂くよりは、もつともつと現實を離れた、一寸表現出来ない混亂した心の状態に支配されてゐます。お許し下さい。これは僕の夢に過ぎません。あはいあはい幻に過ぎません。貴女がふつと一息ふいて下さると忽ち消え失せるやうな泡沫に過ぎません。どうか僕のかうした夢をお許し下さいまして、あなたは僕などよりもつと若い、そして貴女の希望にかなつた男性と結婚して、楽しい幸福な家庭人となられますやう不思議な縁とでも申しませうか、ふとした機会から、貴女の一生の幸福を祈らして頂くなんて、それだけでも僕は感謝しなければ勿體ないと思ひます。どうか僕の失禮をお許し下さい。ではどうか御幸福に。可愛らしい雛鳥のやうなお嬢様に！左様なら。」

この手紙を持つて、その娘さんのお母様が私に断りに來ました。

それから暫くお話しする人もなく、二三ヶ月経つた或日Tさんから、「二度目に僕に書類を見せて下さいました職業婦人に面會したいがどうでせうか、今更先生には面目ないが」といふことでした。私は早速その職業婦人のA子さんに相談しました。會見て見るといふ事になりました。

いよく二人を紹介致しました。先きにTさんに紹介した二人の若い娘さんは、二人とも美しい長身の和服姿でしたので、とても御紹介の場面が濃艶でしたが、A子さんは鼠つばい最新式のオーペーに紺の洋服、それがびつたり性格に合つて、じみな澁い感じのする初対面でありました。私も一寸手がすいてゐましたので御一緒に少し話しました。

「Tさんは、お年に似合はない純真な、そして無邪氣な方でいらつしやいます。」と私は紹介しました。

「では私のやうに、生活のために悪戦苦闘を續けて來た人間とは共鳴しないでせう。」

「かへつて反對でよろしいと思ひます。」

「僕は自分では、ちよつとも面倒な人間ではないつもりでゐます。又面倒な条件などならべるには、あまりに貧弱な、安月給取りに過ぎないのですから。」

そんなにおつしやられると、私など御挨拶に困ります。御両親様は御健在でいらつしやいますか。」

「國元で呑気に暮してゐます。長兄がしつかり者ですから、親達は幸福です。」

「お姉様とお三人ぎりの御兄弟でいらつしやいますか。」

「さうです。姉は醫者に嫁いで三人の子供があります。兄も子供が四人ゐます。」

「たゞ今まで、どうして御結婚なさいませんでしたの。」

「理由はいろいろありますが、結局いゝ人によつからなかつた事が最大原因でせう。」

「おありになつても、難しかつたんぢやありませんか。」と私が口を挿みました。何といふ事なしに三人顔見合せて、笑つてしまひました。

「僕もですが、あなたも随分御ゆつくりで。」

「私も何といふことなしに、働いてゐる中にうかくと二十八になつてしまひました。」

「お互に人の事は解つても、自分の事は解らないものですな。」と、私が申しました。

「結婚なすつたら、どなたも御面倒みる方はないのですか。」

「その點は非常に責任が軽いのです。」

「私など永い間働いて來ましたから、出來ればお姑さんのいらつしやる方で、何かとお世話やいて下さる方が身の爲だと存じますが。」

「よいお心掛ですね。一緒には住みませんが、母が聞いたら喜ぶでせう。それに僕は俸給が恥かしい程少いのですよ。」

「私は長い間働いて來ましたから、結婚したら、完全に家庭人になりたいと思つたこともありませんが、國力の増進といふお國の歩調に合致するためには、結婚しても出来る範圍で、働かなければ濟まないといふ様な氣持でもゐます。」

「あなたのやうなお心掛で職業に就いてゐられる方は御立派ですね。みんなさうした心構だつたら、職業婦人だからといつて世間は非難しないでせう。」と、又私が口を出しますと、Tさんは力を得たやうに、

「ぢやあなたは、結婚しても働く意志があるんですか。」

「ありますとも。そして家庭生活を大いに豊富にします。」

愈々喜んだTさんは、釣込まれたやうに、

「貴女は讀書がお好きのやうに、申込書にお書きでしたが、主にどんな種類の書物をお讀みになります。」

「どんなつて特に愛読したといふものもないのですが、たゞ何か読んでゐないと文化におくれるやうな気がしまして。」

「僕は讀書が趣味といふよりは、生活の必需品なのです。ですから讀書が好きだといふ女性があつたら、それだけでもうその女性が好きですね。」

「矢張り文學書ですか。」

「まあさうでせうね、隨筆のやうなものも好きです。僕のやうに生活様式の狭い者には、讀むといふことは必要なんです。つまらないお話ですが、僕は一時いろ／＼な小説に出てくる女性を、自分の結婚の對象物にして楽しんだ時代がありました。」

「たしかにさういふ時代がありますね。」

「あなたにもありましたか。」

「ほんの一寸の期間でしたが、空想時代がありました。」

「僕は現代の作品より、明治時代の文豪のもの、例へば紅葉、露伴、藤村、あゝした人のものに心ひかれます。」

「舊いものの方が尊いやうですね。脚本なんかお嫌ひですか。」

「嫌ひぢやありません。イブセンのものなんか殊に好きです。ノラ、ヘツダガブラー、ゴースト、随分讀みました。ノラの性格なんか悪くないです。」

「ノラは劇で見ましたが、讀んだ感じの方がよかつたやうです。ノラに扮した女優がたゞ可憐といふだけで、心機一轉してから出て行く迄の變目が、いかにも弱々しかつたのです。あれでは勢よくドアを開けて外へは飛出したものの、外氣に觸れる途端に急に夫が戀しくなつて、飛込んで來て夫の胸にしがみつきさうでした。」

私は又、口をはさみました。

「日本の女性は、さういふ解釋をして間違ひないと思ひます。又それでいゝぢやありませんか。私の所へお申込みになつてゐる再婚の女の方で、幾人御紹介しても氣に入らない人があります。會つて見ると、別れた夫が思ひ出されて、それと對照して考へるんです。次第にはつきりと先夫を心に描くばかりなのです。それで私は、その別れた人を探し出して、今どうしてゐるかよく調査べ、幸ひ一人であるやうだつたら、あなたから妥協して一緒におんなさいと勧めましたら、道

でも偶然出會つたら、飛附いていこうと思つてゐると言つてゐました。男女の関係ほど神祕で測り知れないものはありませんね。」

「その人は和製のノラですね。」

「今日は先生もお立會下さいまして、非常に楽しい御紹介をして頂き、感謝申し上げます。」

「私は他にお待ちの方がいらつしやいますから、これで失禮いたします。」

それから私は自分の仕事に忙殺されて、すっかり二人の事を忘れてゐますと、纏てゆつくり食事を済ませた二人は、もう十年の知己でもあるかのやうな愉快な顔をして還入つて來ました。

「先生いゝ方を御紹介下さいまして有難う御座いました。」

「いづれ改めて御返事にうかゞひます。」

かう言つて二人は歸りました。

それから約一ヶ月経つてTさんから次のやうな手紙を受取りました。

「突然ながら、僕はA子さんと結婚します。先方からも確答して頂き、僕の周囲も勿論異存ありません。先達A子さんと弟さんを誘つて、近くの山へ登りました。その時私はA子さんに、あなた

はチエホフの「可愛い女」を読みましたかときゝますと、意外にも讀みましたと答へました。あの人は随分いろんな本を讀んでゐます。僕はあのオレニカのやうな性格の女性がとても好きなんですといひますと、大概の女はオレニカのやうに自分の與へられた境遇に満足して、それに順應して行く素直さを持つてゐます。それを旨く引出して行くのは男の腕ですと、はつきりおつしやいました。先生あの人は僕の相手としては、勿體ないと思ひます。容貌の美よりも多方面な性格のよさに魅せられます。ほんたうに先生は、結婚難に溺れてゐる瀕死の僕を、よろこそ救つて下さいました。心から御禮申し上げます、近々に二人揃つて先生をお訪ねします。どうか御機嫌よろしく。」

その日の中に、不思議にもA子さんからの手紙を受取りました。必要な點だけ書いて見ませう。「Tさんは純真な、そして淡い文學青年の域をぬけきれない可愛い方です。性格的には物足りない點もありますが、私のやうな年のおくれた、そして女の美しさも持ち合はさないものに満足して下さいました事を、どんなにお禮申上げても言葉では盡くせません。私はたゞ今迄職場は修養の道場だと心得て、出来るだけ自分を伸ばすことに力めて來たつもりでゐます。これから結婚生活

に這入り、まして、夫からかつての職業を引合ひに出されて、夫に不満を與へたり、小言の材料にされたりすることのないやう、今後とも不斷の努力を續けます覚悟でゐます。先生の御配慮心からお禮申し上げます。」

かういふ美しい手紙でありました。職業婦人にとかくの批難の多いこの節柄、A子さんは同志のために萬丈の氣をはいて下さいました。

二人は暫く楽しい交りを續けましたが、最近結婚式を挙げ、〇〇の奥、玉川べりに新築の家をみつめて引移りました。定めて愛に満ち満ちた御家庭を營まれてゐられる事とお察し申上げて居ります。

二〇 世の父・世の母、子のため忍べ

執務時間が終つて、歸り仕度をしてゐると、又靜かにドアが開きました。

黒ずんだ洋服を着て、髪を無雑作にたらした二十二三の娘さんが遠慮深く這入つて來ました。

「もうお歸りのお時間ですので、一寸御相談申上げたいことが御座いまして。」

「かまひません。うかゞひませう。」

「私はもうさつきから來てお待ちしてゐたんですけれど、あんまり大勢さんで、氣おくれがして這入りかねてゐたんです。」

「さうでしたか、お申込みですか。」

「いえ、私のことではないんです。私の母の再婚のことなんです。母をどうか優しい、あまり物質に困らない方に貰つて頂きたいんです。」

「あなたのお母様のことですか、いつお父様にお別れになりました。」

「父は生きてゐます。」

「御離縁になつたのですか。」

「戸籍上の手續は未だしてありませんから、父と母は夫婦です。けれども母は二年前から父と別れて、東京で働いてゐます。」

「實際に別居していらつしつても、法律の上では立派な御夫婦ですから、再婚は出来ませんよ。」

「それを何とかして頂くことは出来ませんか。」

「そんな亂暴なこと出来るもんですか。」

娘さんはうつむいて涙をふいてゐます。

「それより、あなたのお母様はどうして、お父様と別れていらつしやるんです。」

「先生、そのわけをお聞き下さいませるか。」

「うかゞひませう。」

「私の父はとても悪い人なんです。悪いといふ意味は違ひますが、他人に迷惑を掛けるとか、不義理をするとか、そんなことになしに、母や子供にとつてとても悪い夫であり、悪い父なんです。」

「それで他人様には猫のやうにお人よしなんです。その爲め母や私達子供は、とても悲しい思ひをして來ました。」

「世間でよくいふ内面が悪く、外面がよいといふ方なんです。」

「さうなんです。ですから母は餘計はいさうです。それに母は極く氣が小さくて、自分一人できよくしてゐる方で、決して自分の苦しみや悲しみを親類や他人に打明けて、ちつとでも世間を明るく渡らうとはしないのです。」

「それにしても、どうしてお母様が、それ程よく／＼なさることがあるんです。」

「何事によらず父とは性格が合はないやうです。例へば、父は人から頼まれればいくら損をしても引受けるといふたちで、自分にも解つてゐながらお人よしのため斷りきれないんです。そして大迷惑を掛けられて母や、子供達に迄難儀をさせて平氣でゐるんです。それを母が不平がましく言はふものなら、すぐ持前の一徹短慮で、母を打擲するんです。私達が母に同情して父をとめると、今度は私達をひどい目に逢はすのです。弟なんか幾度父に飛びついていつて、酷い目にはされたかしれません。私達は小さい頃から、かうした父と母の悲しい争鬭の中に育つて來まし

たから、二十三の今日迄結婚しようなんて考へたこともありません。弟は只今中學三年生ですが、母に一番同情してゐます。長男ですから父の側を離れることは出来ませんが、學校出たら勤めて母に孝養つくすと誓つてゐます。」

「現在、お父様と弟さんは御一緒なんですね。」

「さうです。」

「お國はどちらですか。」

「〇〇縣の〇〇市です。」

「お父様は何をしていらつしやる方です。」

「別になにもしてゐません。祖先から傳はつた不動産で暮してゐます。父は我儘な一人息子として育つたんです。私のおぢいさんの生きてゐた頃は、今の三倍ぐらゐの財産があつたんですが、父がみな人に騙されて失くしてしまひました。それを母は非常に苦にして病氣になつたこともあります。父は決して自分の非を悔めません。年と共に我意が募つて益々母を苦しめますから、私はとうとう忍耐が出来なくなつて、弟と相談の結果、母を連れて家出をしてしまひました。」

「それはいつのことですか。」

「今から二年前の秋です。」

「東京には頼りになる御親戚でもおありになるんですか。」

「何にもありません。たゞ夢中で上京しました。もつと住みよい世界があるやうな気がしまし

て。」

「今どうしていらつしやるのです。」

「私は〇〇の方の軍需會社の事務員をしてゐます。母もその會社の寄宿舎の炊事の方を受持つて働いてゐます。」

「お二人で御生活にはお困りになりませんか。」

「生活には困りませんが、近頃母はめつきり弱つてまゐりまして、どうやら國へ歸りたいやうな意向を漏らします。」

「さうでせうね。弟さんのことだつて御心配でせうし、それに東京へ来て他人の中で働くといふことは、お母様のやうな方にとつてけつして樂なことぢやないでせう。まだ氣難しい、我儘のお

父様の機嫌をとる方がいゝと思ふやうになられたんぢやありませんか。」

「どうもさうらしいんです。私もあんなに決心して来た母にも似合はないと齒痒く思ひます。どうして今少し強く頑張れないかと、私の方が悔しくなります。」

「いろ／＼世間の學問なすつて、お母様の心境に變化をきたしたわけです。けつして悪いことではありません。」

「それに近頃弟の手紙によると、父は、母と私が歸つて来ないなら、他から貰ふと言つてゐるさうです。そんな手紙を見て、母は私の目にもわかる程、そわ／＼してまゐりました。」

「結構なことです、あなたはちつとも悔しがすることはありません。寧ろお母様のために喜んでいゝことです。」

「私は母のために、父に反抗し續けて、自分の結婚をも犠牲にして厭はぬ覺悟で来たのです。」

「純真なあなたが、ひたむきな心でお母様に同情し、一生懸命庇護していらつしたのには、私も感心しました。けれどもお母様にばかり厚くなつて、お父様のことを今少し考へて上げないといけませんよ。お父様はあんた方お二人が家出なすつた後、どんなに不自由だつたでせう。後の

お母さんもお貰ひにならずにゐられるところを見ると、一日も早く歸つて来ることを願つてゐられるやうですね。」

「そんなら迎へにでも来さうなものですのに、一本の手紙すら呉れません。」

「それはお父様の方でいふことですよ。無斷で家出をするさへ不届至極であるのに、一度の便りもしない。どうなとなれと、かう言つてゐるかもしれませぬ。」

「父はさういふ人です。とても手前勝手の人ですから。」

「とにかく、お母様がお父様の許へかへりたい氣持になられたのは事實なんですから、あなたはよくお父様との連絡をとつて、お母様をお父様のところへお歸ししてお上げなさい。」

「母は又父に虐められて泣くにきまつてゐます。」

「他人のところでは泣いて暮すより、夫の側で可愛いお子様の側で、泣いて暮す方がどんなにか知れませぬ。」

「私は母を父の手に歸す位なら、こんなに苦勞はしません。どうかして優しい立派な人に貰つて頂いて、母の餘生を幸福にしてやりたい。そして横暴で氣隨氣儘な父をうんと反省させてやりたい

い。それには私の結婚など犠牲にしていゝつもりでゐました。」

「それではお母様より、あなたの方が餘程お父様に反抗してゐます。世の中には品行が悪くて、妻子を困らす人もあるのに、お父様はそんな御様子もなく、極くお堅い方のやうです。ですからお父様にとつて、お母様は此の世で一番いゝ奥様であり、又お母様にとつても、お父様は誰よりもいゝ夫といふことになるんです。」

本當にお母様の幸福を願ふなら、再婚なんて考へは斷念して、一日も早くお父様へとどけて上げなさい。そしてあなたもいゝ結婚をして下さい。あなたはお母様と御一緒ですが、弟さんは一番欲しいお母様の愛情を受けることなく、優しいお姉さまにも會ひず、氣難かしいお父様の側でどんなに淋しい思ひをして日を送つてゐることとせう。あなたの氣持一つで一家楽しい團欒にかへれると思ひます。」

「母と私とがその氣持になつても、相變らずの父の精神では、矢張りもとの黙阿彌で、かへつて母が苦しむと思ひます。」

「今ではお父様も、餘程考へなほしたことでせうし、弟さんも追々大きくなつて來ます。今度は

弟さんが、お母さんをしつかり保護します。いくら横暴なお父さんでも、長男には遠慮するもんです。大事な弟さんが間違つた方へでも走られたら、それこそ大變です。長い間のお母様の苦勞が水の泡です。お母様も出来ない辛抱をなされば、又お子様で報いられます。お子様の成人を樂しみに今一息頑張つて下さい。私が言つたと傳へて下さい。」

「母はとても氣の優しい、どつちかといへば意氣地なしといつた方なんです。」

「しつかりしたあなたが附いていらつしやるから大丈夫です。今迄我慢してお子様や家のため盡してお出でになつたのですもの。こゝで妻として、母としての權利を放棄してしまふなんてことはありません。あなたが氣の弱いお母様を大いに激勵して、どこ迄も弟さんを補けて祖先から傳つた正しい血統の家庭を護つて下さい。かうして一家の繁榮のために努力するのは祖先に對する義務であり、またお國に對する御奉公と存じます。あなたの弟さんも、ぢきに國家のため戦場に立つて、重大な任務につかれる方です。どうか御兩親、お姉様と一家そろつて送り出して上げて下さい。」

今までだまつて聞いてゐた娘さんは、漸く顔をあげ、はつきり私の顔を見てぼろ／＼と涙をこ

ぼしました。私も胸がつまつて、娘さんの顔から目をそらしました。

「よかつたら一度お母様を連れていらつしやい。お話したら又いゝこともあると思ひます。」

「先生におつしやられて、私も父に似て頑固なところが随分あつたと気がつきました。母は私さへうんと言つたら、今夜にも國へ歸るといふかもしれません。」

「それは結構です。それにはあなたがお父様に反抗してゐる氣持を捨てて、よく弟さんと連絡をおとりなさい。そして姉弟心を合はせてお父様とお母様をしつかり結んでおあげなさい。」

「一生懸命いたします。」

「一念天に通ず、この意氣でね。」

「有難う御座います。」

かうして、母思ひの娘さんは、清淨な顔に決意の色を現してかへつて行きました。

二二 子寶抱いて

「先生今日は。買物にまゐりましたので、ついだと申上げては失禮ですが、お顔を見せて頂かうと存じます。」

「ようこそお出で下さいました。」

「家内も子供も、連れてまゐりました。」

「おや〜お揃へで。さあ〜早く奥様をお呼び下さう。」

其所へ赤ちやんを抱いた、若い奥さんが這入つて來ました。

「御無沙汰申上げてをります。お變りもいらせられませんか。」

「有難う御座います、お蔭様で。あなた様もこないゝ赤ちやんがお出來になつて。」

私が赤ちやんを抱いてあやすと、手鞠のやうにころ〜はすんで、飛び上ります。

「どうも商人の子は生れ落ちるとから臆面なしで困ります。」

「人見知りをちつともいたしません。」

夫婦は機嫌のいい赤ちゃんの顔に、相好を崩して、代る々々發育のいいこと、智慧づきの早いことなど話して聞かせます。

「先達て本部へうかゞつて、所長様にも、他の先生方にもお目にかゝつて來ました。」

「所長さんは、あなた方がいゝ家庭生活を營んでられるので、とても御満足です。」

「大層お喜び下さいまして、折があつたら新宿にも訪ねて、あちらの先生にも喜んで頂くやうにと申されました。」

「さうでしたか、よくお出で下さいましたね。」

「結婚以來二人とも益々健康で、直ぐこんなのが生れてしまひました。」

「あんまり早くてお恥かしいやうです。」

「どうか次ぎ次ぎと澤山御奉公なすつて下さう。」

赤ちゃんは、若い兩親の幸福感をいやが上にもそゝるかのやう、益々御機嫌で、私の膝の上に立つたりしやがんだり、忙しく跳ねます。

「皆さんお待ちのところ、長くお邪魔をしては先生御困りでせうから、お暇ま申し上げます。」

かう言つて二人はやがて、赤ちゃんを御主人が抱いて、歸つて行きました。

この廣い世界、限りない人数の中から、結ばれたたつた二人、それこそはよくく深い因縁と言はねばなりません。一人から二人となり、二人から三人となる。かうして人類發展の因となり、國家繁榮の基をなす。これこそお國に對する皆人の務めでなくて何でせう。

いたづらに新家庭の幸福に酔ふことなく、ひたすらに商賣大事と建設の一途を辿りつゝあるお二人の多幸を祈らずにゐられません。

このお二人を紹介した時の様子を、書いて見ることに致します。

お約束の時間にきちんとお出でになつた男子に、私は遠慮なく申しました。

「〇〇さん今日は御紹介ですのに、着替ぐらゐして、お髪でもそつてお出でになればいいのに。」
「どうも忙しいもんですから。實はお得意様にお急ぎの配達がありまして、その出先からすつと此所へまゐりましたので、こんなみつともない風態を致しまして、先様へ對して失禮で御座いましたでせうかしら。」

「失禮より、あなたが御損ですよ。特別に飾る必要ありませんが、もつと男前を上げていらつしやればよかつたのに。」

「恐入りました。もつと裸一貫の私、ありのまゝを御覽に入れようとも存じまして。」

「ほんたうに眞面目なあなたを現して、結構なんですが、今の若い娘さん達は風采といふこともなかく考へてゐますから。」

「御尤もで御座います。ちや着替へてまゐりませうか。」

「だつて、そんなにお待たせしては、ちや一寸お待ち下さい。」

私は紹介室に待たせてある女の方へ話して見ました。

「御ふだんの儘で御座います。」

「私、ちつとも構へません。結構ですわ。」

「でもあんまりひどいんですよ。配達の歸りだと言つて、きたない作業服に跣足袋のまゝなんです。」

「かへつてよろしう御座います。」

「あんまり正直過ぎて。あなたがさうおつしやれば御紹介申上げます。」

それから私は男子を案内して紹介しました。

「只今先生から御注意頂きましたが、大變失禮な風を致しまして、お許し下さい。」

男はお相手の女が挨拶に困る程鄭重に頭を下げました。女も慇懃に、

「どう致しまして、私は少しもかまひません。」

「さあ二人共お掛けになつて、御ゆるりお話下さい。」

「有難う御座いました。」

色の白い丸顔のあいくるしいこの女は、〇〇に住むさる獨逸人の家庭に、お子様附として多年奉公した人であります。三人のお子さんのお世話をして五六年も忠實に働いてゐる中に、何時とはしらす年をとつてしまつて、二十六になりました。規則正しい獨逸婦人の薰陶と、物に不自由を感じない上流の生活にひたりながら、飽迄日本女性の婦道をわすれぬ可憐な大和なでしこでありました。日常語にはことかゝぬ程に獨逸語もあやつります。遠い北國に生れ、家庭の事情で二十歳の頃からこゝへ奉公し、貰ふ給料の半分は必ず國元の両親に送金してゐたといふ孝行の方で

した。弟さんとたつた二人の姉弟で、その弟さんがやつと獨立して親の面倒を見ることになり、自分もやうやく解放されたわけです。

一方男子の方には両親がなく、さる下町の大きな商店の外交員であります。高等小學を出ると間もなく、見習として入店、忠實でまめくしい働きぶりは、やがて御主人始め一同の認めることとなり、今では大勢の店員の指導役として、重要な役割を勤める側ら、大事なお得意廻りはこの人の仕事になつて、他の店員では代理が出来ないといふ今の状態であります。

二人は結婚後郊外の綺麗なアパートに新家庭をいとなみ、かうして親子三人の幸福な日々をおくりむかへてゐます。さうやかながらも足ることを知り、自らの分に満足した生活こそ、現實の天國でありませう。

一二一 初めの一步、遂には千里

「先生突然で大へん失禮で御座いますが、私のやうに、女の若さも貞操も精根も、すつかり費ひ果してしまつた者にでも、結婚の資格があるものでせうか。」

それは今にも時雨れさうな空模様、一しほ肌寒を感じる晩秋の或日の午後でした。小さな包と洋傘とを小脇に抱へた、あまり身綺麗でない容をした、見たところ三五六の女が、人氣のないうあたりを見廻して幾分安心した形で私の前の椅子に腰をかけると、いきなりかう申しました。

「突然でよく解りませんが、兎に角お話を伺ひませう。」

「有難う御座います。話すとき長くなりますがお聞き下さいませうか。」

「他にお客が待つてゐるゝ時は、あまり長い身の上話は伺つてゐる事も出来ませんが、今日はよい鹽梅に他に待つてゐられる方もありませんから、お聞き致しませう。」

私がかう言ひますと、女はやうやく落ちつきを取戻したやうに、やう俯向き加減にして話し出

しました。

「私は〇〇縣の者でして、多分御存知かと思ひますが〇〇縮で知られてゐる〇〇町に生まれました。父は祖父の代から渡世にしてゐる紬織の手縫職人でして、あまり有福な暮しでない上に子供が大勢をりましたので、随分と苦勞も多かつたのであります。そんな事で私も小學校を出ただけで、後は両親の仕事の手助けをしたり、妹達の子守をしたりして毎日を送り迎へし、決して幸福な娘時代を過して來たとは申されませんでした。それでも生まれつき色が白かつたり、又性質もどつちかと言へば人なつっこいとも申すのですか、誰にもで好かれる性でしたので、町の人達の評判娘となり、やれ器量よしだとか、綺麗だとかちやほやされた事が結句身の破滅の因となつてしまつた譯と思はれます。十七八歳の頃から嫁に嫁にと随分方々から有つた縁談も家が貧しかつたため、もう少しもう少しと、親も斷り續けて來たのです。ところが人を仲にして何べんも出入りする内に、とうとうお金の力で親を承知させた男がありました。それは私とは親子程も年の違ふ、しかも妻子まである男だつたのです。」

「妻子があるつて、一體あなた自身はそれを承知でいかれたのですか。」

「私にもうすくは分つてゐたのですが、私の両親を金で目をくらましてしまつたのです。その男は商人でして、たゞもうお金を儲ける事と、お金の有難みより外には何も知らない男だつたのです。私の両親が暮しに樂でない足下を見すかし、金で誘惑して、體よく私を騙し取つたのです。私もまたうか／＼と十九のをとめの寶を、大して多くもないお金でその男に賣られる事を承知してしまつたのです。今から思へば何といふ大馬鹿者であつたらうと、つく／＼口惜しくて口惜しくたまりません。親も親ですが、私も十九にもなつてゐたのですから、今思へばもう少し思案もあつたらうにと残念でなりません。いかに親が金で説かれて承知はしても、本人の私が承諾しなかつたなら、どうでもかうでもゆけとは親も言はなかつたらうと、今では親を恨む氣持よりは自分の愚かさが後悔されます。それといふのもつまりはあんまり不自由な暮しだつたので、娘心にいゝ着物も着たい、はたからかれこれ言はれてゐただけに、紅おしろいもつけたい。かういつた淺はかな考へでしかなかつた事と思はれます。そんな事でつひ私は初めの一步をあやまつてしまひました。かうした生活が暫く續きましたが、月日の經つにつれて私は自分の境遇がいかにあさましい、人交りも出來ない日蔭者であることに氣が付きました。さう思ふたらもう堪えられませぬ。」

その男がまるで鬼のやうな蛇のやうな、恐ろしいけどものみたいに見え出して、一日だつてこんな生活に我慢出来なくなつてしまひました。」

こゝまで一気に語り續けて来たこの女は、何かおつかないものにも魔はれでもしたやうに、そつとあたりを見廻しました。

「先生、こゝでこんなお話をいつまでもして宜しいのでせうか。」

私も大體この女がどんな頼みで来たものか、凡その見當もつき、根がそれほど悪人でもないのに、無智とは言へ境遇から遂に一生を誤つたものである。言はば氣の毒な同性であると思ひ、出来る事なら何とか救つて上げたい。また仕事の上でも何か参考になる様な事もあることと思ひましたので、幸ひ珍らしく他に來訪者もなかつたので、この女の身の上話を更に聞いて見る氣になりました。

「あなたさへ宜しかつたらお話下さい。他に客も見えませんか。」

女はしばらく黙つて俯向いてゐましたが、又靜かに話し出しました。

「それからといふもの、私はいくど飛び出さうかと決心したか知りません。それでも中々その折

が得られませんでした。或日思ひ切つて知人の許へ身を隠してしまひました。そんな男ですから私に逃げられたと言つて、そのまま、指を銜へてじつと私の歸るのを待つやうな氣遣ひはありません。早速私の兩親の所に行つて親も承知でした事と、その不當を詰責り、草を分けても探し出さねば裁判沙汰にするといつておどかしてゐたさうです。兩親や妹たちは恐がつて生きてからもそんな様子だといふ事も聞かされました。私もこれを聞く毎にどんなに心を痛めたか分りません。それでも何うあつても戻る心にはなれませんでした。私も漸く二十になつたばかりでしたが、一心は恐ろしいもので、あんな獸と一生暮すほどならいつその事、川へでも身を投げて死んだ方がましだと固く決心はしてゐました。かうして一步も外へ出る事も出来ない、身も心も苦しい日夜を悶へて居ります時に、思ひがけない救ひの手が降つて湧きました。といふのは外でもありません。それは私の友達の兄さんで私の苦しい立場に同情し、私を連れて自分も一緒に私を遠い所に隠匿つてくれようと、友達を通して私にすゝめてくれたのです。友達もどういふ積りか、さうする事を頻りに私に勧めます。私も溺るゝ者の譬への通り、あまり後先の考へもなく、無我夢中でその人の言ひなりになる事に決心してしまひました。そして私達二人は、そつと眞夜中の汽車に

乗つて何の目當もなく、少しばかりの路銀を懐にしたなり、東京へ出て来てしまひました。

その後で國元の両親はその男から酷い迫害を受け、とうとう家屋敷まで賣拂つて損害賠償をさせられたと聞きました。僅かの金で私を破滅のどん底に突落したばかりか、私の一家を住む家までなくさせる惨めな有様にさせたのは皆その悪い男の仕業です。私は拭つても拭つても掻き消すことの出来ない悲しみと深傷とを負はされてしまつたのです。それからといふものは男といふものに對して始終恨みこそ持て、何の信頼も魅力も感じないやうになつてしまひました。私の苦境を救つてくれた友達の兄さんに對してだつて、唯一緒に棲んでゐるといふだけで、夫といふ様な感じは致しません。此の人は何のわるげもなく、又これといふ腕もない、たゞお人好しいふだけに過ぎない人です。東京へ出て暫くしてあと、やつと或る小さな會社に仕事を見つけ、大した仕事でもありませんのに、別に不平にも不満にも思はず、又私のやうな女にも満足しきつて毎日せつせと働いてゐました。私も少しは心も落付き、東京の様子にも幾分慣れて來ましたし、又少し許りの持合はせもなくなつて、男の貰ひだけではいくら二階借りのつゝましい生活でも苦しくなつて來ましたので、私も何か仕事を見つけて働かうといふ氣になりました。そして自分などにも

出来る仕事といつては差當り、派出婦といふものが一番よからうと云つてくれる人がありましたので、その會を教へて貰ひ、自分で行つて或る山の手の派出婦會に入れて貰ひました。

私はそれからは男の家へ戻ることは滅多になく、男はこれにも不平も言はず、外で食事をしては相變らず眞面目に働き續けてゐたのです。斯うした生活が相當長い間續きました。私は毎日次ぎ／＼と變つた家庭に出ては働いてゐる中、境遇の力とでも言ひませうか、愚かな私にも段々と世の中を視る眼が擴くなつて參りました。同じ女と生まれながら廣い立派な庭園を持つた豪奢な屋敷の中に、奉公人よ召使よと數多の女達にかしづかれて整潔に暮す奥様があるかと思へば、又一方では御主人が出張中に赤ちやんを産んで、手傳に來てくれる親姉妹とともなく、頼んだ家政婦の私を杖柱とも頼んで貧しい産褥に只管日だちの早かれと祈つてゐる若い奥様もあります。さうかと思へば、奥様に大勢の小さい子供を残して亡くなられ、ほと／＼困つてゐる中年男もあります。時には國元から送られたお金をよからぬ遊び事に使ひ、さうした女と假りそめの同棲から遂に女の妊娠といふ事になり、止むないアパート住ひをする地方出の物持の學生さんの所へ、産後の手傳に行つた事などもありました。かうして私たちは社會のあらゆる方面に出入りしますので、

色々な世間學とでもいふものを自然に學ばされる形になります。

しかしこの様な日々の生活といふものは私のやうな女にとつては、決して自分でも幸福であるとは思ひませんでした。それでも私の場合は、そんな事を言つても居られませず、毎日働いてはゐましたものの先々の事も案じられますし、あまり長く歸らずにゐると一緒にゐた男が會の方へ訪ねて來たりする事もありました。私は離れてゐればゐる程その男には頼る氣になれず、幾分でも世間を見た私には一層その人に不満を感じるやうになり、出来る事なら綺麗に別れて身輕になり、何もかも新らしく出直してみたいといふ様な心が、いつとはなしに強くなつてゐました。そんな心でゐる所へ、丁度私の派出されました御家庭が、それは／＼何と申しませうか、私などの出這入るには勿體ないやうな、立派な心掛けの人ばかりの家でありました。それは或る學校の教頭とやらをなさつてゐるゝ先生のお宅でありました。その奥様が胸の病で〇〇の海岸に轉地なさつてお出での處へ、田舎から頼んで來てゐた女中さんが、止むない事情でお暇を頂いて歸つたので、その後へ私が派出されることになつたのです。お家には十六になられる女學校に通つてゐるお嬢さんと、小學校六年生のお坊つちゃんとがゐられるだけで、誠にもの靜かな

御家庭であります。生活はさして贅澤といふ程ではありませんが、奥様の御實家が地方の物持ちでもあるのでせうか、米・味噌から時には魚まで、また野菜・果物はじめ、季節季節の珍らしい物を斷へず送つてよこされますので、小人數のお家だけでは食べ切れず、隣り近所や、時々お見えになられる同僚の先生方に澤山お上げなさるといふ有様なので、お隣り近所からも、先生よ、お嬢さんよと大變親しまれ、尊敬されてゐるよい御家庭なのです。御主人様といふ方は、流石に教育者だけあつて私などには用事の時以外めつたに口もお聞きになられませんが、それでゐても申されぬ親しさを覚える徳の備はつたお方でありました。そして殆ど日曜ごとに、お子様たちをお連れしては奥様を見舞はれます。私も三度に一度は土産ものを持つてお伴が許されました。この御主人の奥様に對します優しさは何とも口には言はれない所があり、私のやうな者にも、世にこんな御夫婦があるものかと、今まで自分の經て來た境遇と比べて、まるで別な世界のやうに思はれ、ひとりで私は涙の出た事が幾度もありました。私はこれまで男といふ者に尊敬も信頼もおけずに來ましたがこの先生を見て、始めて是がほんたうの男だと思はされました。私はこんな御立派な家庭に長くゐさせて頂いたら、私の様な荒んだ心にも段々新らしい素直な

芽が芽生えて来るのではないか。長くこの御家庭で働かせて頂きたいものと心からさう思ふ様になりました。かうして私にとつては是までにない楽しい日々が半年あまりも続きました。私の心も段々と素直になつて或る夜、田舎から送られて来たお餅で私が拵へたお汁粉が大變おいしく出来たと皆様から褒められながら、御一緒にお相伴させて頂きました折、私は先生やお嬢様に聞かれるまゝに、今迄は何一つ話した事のなかつた私の過ぎにし不幸の身の上のあらましを、お話し申上げた事がありました。それから後、御主人様は一層私の境遇に同情して、何かと人の往くべき道を教へて下さいます。私も少しづつでもさうした先生のお言葉が身に泌みて、自分のこれまでの考へがほんとうに間違つてゐたと氣がつくやうになり、今からでも今一度出直して人並の生き甲斐ある此の世を送つてみたいと思ふやうになつて来たのであります。

そのうちに一家揃つての心からの看護が天に通じたとでも申しませうか、一時は相當難かしいと思はれた奥様の御病氣も次第に快方に向かはれまして、やがては御歸宅といふ事にまでになりました。私は今度は、若し奥様が歸られたら此の御家庭にも御厄介になつてゐられなくなりはいかといふ様な事を考へ、心細くなる思ひでした。それでも私は此の大恩ある御一家が御幸福を取

り戻す事を思ふと、奥様の御全快御歸宅を心から祈らずには居られませんでした。

私は此のお宅に参りまして既に十月に餘ります。この間三度程、前の男の所を訪ねました。その人にもそれとなく現在の自分の氣持を話した事でありました。幸ひと申してよいか何うか、男の國元では母の病氣その他から、何べんもその人に國元へ歸るやうにと勸めて来て居りました。私もさうした便りを見て男の人に歸國をすゝめました。男も、一人暮しのわびしさもあつたのでせう國へ歸る事になり、私も承知の上で遂に歸國致してしまひました。

御主家の奥様は愈々御全快で家中揃つてお迎へに参り、元氣なお足どりで御歸宅になりました。それは今から一ヶ月程前の事でありました。

私も此の先生のお宅のお蔭で幾分でも心が清められたやうに思ひます。先生も奥様もこのまゝ續けて手傳つてゐてほしいと、たつてすゝめて下さいましたが、私も先々の事を考へ、若し私のやうな者にでも萬一にも相應しい相手があるものでしたら、今度こそ眞面目な結婚をして今までの罪亡ぼしのつもりで女の道を盡くしてみたいと思ひ、こちらの事を人から伺つてゐましたので、今日こゝへお訪ね申上げ、何もかも身の恥をさらけ出して、こんのお話を申上げましたやうな次

第であります。大變長いこと、こんなつまらない身の上話にお暇をつぶさせまして申譯ない事に存じます。何卒お許し下さい。」

話はやうやく一段落を告げた譯でした。

「では東京で御一緒に棲まはれた男の方といふのは、今國元に歸つて何うしてゐられますか。」

「妹の便りによりますと、今でも元のまゝ一人で何か勤めをしてゐるやうな話です。」

「それなら貴方は東京で結婚なさらうなどと考へず、その男の所へ戻つて、是までのやうな氣持でなく、心から素直な妻の心になつてお盡くしになるのが女としての道です。」

「私も時にはさう思ふこともありますが、今更どの顔下げて國へ歸られようかと思ふのです。尤も最初に私たちを苦しめた悪い男は、何年前前に亡くれて、その方の心配はないと聞かされて居ります。」

「それなら尙の事です。お話の様子ではその男の人は大層善良さうな方ですから、あなたがこれまでの冷淡であつた心を改めて、心から盡くしましたら屹度赦してくれるでせう。第一にあなたの、その御亭主さんに對する心をすつかり改めなくてはなりませんね。」

「それはもうその通りで、私も自分の我が儘であつた事を、重々心に詫びて居ります。」

「心から妻として夫に仕へる事が出来ますか。」

「今の私の心では、それも出来ない事もないと思ひます。」

「こゝへ来るまでは、あなたはまだ迷ひの夢がはつきり醒めなかつたやうですね。別に新らしい結婚の相手でもあつたら、お世話して頂かうと考へてゐたのですね。」

「途方に暮れたものですから、遂ひそんな考も起しました。」

「あなたのやうに意思の餘り強くない方は、東京にまご／＼してゐないで國元へお歸りなさい。廣い東京の中には歸りたくも故郷を持たない人さへあります。幸ひあなたには生れ故郷があつて兩親も兄妹もあるやうですし、第一あなたの實のしかも恩のある御亭主さんが、結婚もしないで一人でああなたの歸ることを待つてゐてくれるのですから、一日も早く歸つて今までの分まで一生懸命にお盡くしなさい。」

「さう出来ればそれが一番いゝとは思ひますが。」

「あなたの決心一つです。困りきつた今のあなたを救つてくれるのは骨肉の愛情と、故里の山川

より外にありません。一日も早く歸つて、今度こそ眞面目な生活におはへりなさい。」

「有難う御座いました。御親切なお言葉で親が戀しくなりました。」

さういつて始めて涙を落し、しんみりした様に見えました。

「その心の變らない中に早くなさい。」

その女はせき立てられるやうな私の言葉に漸く腰を上げ、禮言を言つて歸つて行きました。私も疲れを覚え、何かほつとした氣持でした。

x

x

x

それから三ヶ月も経つた或日、私はこの女からの手紙を受取りました。發信地は女の郷里といつた〇〇縣〇〇町としてありました。新宿伊百貨店七階にいらつしやる先生様へ申し上げます、と書き出して、次ぎの様な意味の事が、つたない筆で認められてありました。

「先生にはまうお忘れになつたかも知りませんが、私は三ヶ月程前に突然お邪魔申上げ御親切なお叱りを頂いて歸つた女で御座います。先生のお勧めによりまして私は心を決し、あれから間もなく思ひ出の深い東京を立去りました。幾年ぶりに見る生まれ故郷は、今も昔と變りありませ

ん。私のやうな者をも皆がへだてなく迎へてくれました。全く思ひがけない喜びでありました。これも偏に先生のお蔭と厚く御禮申上げます。両親も思つてゐたよりは元氣でした。何よりも私を嬉しく思はせてくれたのは、私の前夫が若々しく元氣でゐて、最近出來た町のある軍事工場で働いてゐてくれた事です。私を見ると、もう安心しろ、何處へもいくんぢやないぞと、涙を流して喜んでくれました。私はこの人の純情につくづく自分の我が儘を今更知りました。これからは先生のお言葉通り、一生懸命になつて夫に盡くします。さうする事が又私の幸福でもあると思つてゐます。何うぞく御安心下さいませ。先生も御達者で。」

私はこの便りを見て、あの時我慢してあの長い身の上話を聞いて上げた事も、無駄ではなかつたと思ひました。そして結婚は特に若い女にとつては、最初の一步がどんなに大事か、この第一歩の踏み出しを誤つたら遂に取りかへしのつかない事になると、痛感させられました。この一條の物語も、世の人々の何かの参考ともならば幸ひと思つてゐます。

一三三 三國一の嫁御寮

「三國一の婿といふ言葉がありますが、私のところでは、三國一の嫁を貰ひ當てました。こんな嬉しいことは御座いません。どうか御安心下さいませ。」

「それは何よりでした。いゝお嫁さんをお貰ひになつて、これからあなたのお家はお榮えになりますよ。」

「こちら様のおかげで御座います。」

「お母様も、息子さんも、お別れになつたお嫁さんの悪口を少しもおつしやらずに、御自身の不明と行届かなかつたことを耻入つてお出でになるやうな、よいお心掛けの方ですから、あんないい方が見つかつたんですよ。」

「恐入ります。私がいちつて舊式の上に、忤があんまりお人好しですから、少し強いしつかりしたお嫁さんと思ひましたのが、大失敗のもとでした。矢張りたいがい似合つたところでない

と、お互が不仕合せで御座います。お嫁さんがよ過ぎて私共には調和しなかつたわけです。」

「お嫁さんがあんまり強情ですと、その婚家を滅ぼし、又我が身をも滅ぼしますね。」

「忤とよく性質の合つた、いゝ嫁をお世話頂きまして、私の一家は救はれました。」

「あなたのお家ばかりぢやありません。お嫁さんがよかつた爲に、傾きかけた身代をもちかへして来た例や、大事な息子さんの身持が改つたといふ例はいくらもあります。」

「私共でも、あんまり慾張つたお願ひかは知りませんが、あそこの家では嫁が来て物資的にも精神的にも榮えてきたと、世間様から褒められるやうな人がほしいと、望んでゐました。こちら様のおかげで二度目のところ、勿體ないやうないゝ人をお授け下さいまして、こんな嬉しいことは御座いません。」

「あんな方ですから、お子様にもおやさしいでせう。」

「子供がすつかりなつてしまひまして、氣の毒な程ひつついて離れません。」

「おばあ様がいらつしやつても、お子様にはお母様の愛情が必要なんですな。」

「若い綺麗な母ちゃんに手を引かれて歩くのが、どんなに嬉しいんでせう。それをちつともうる

さがらずに、よく連れて歩きますよ。」

「もつとも、子供は大好きだと言つてゐました。」

「自分の派手になつた着物で、上手に洋服を縫つてやつたり、とてもよく面倒してくれます。私は蔭で拜んでゐますよ。」

「それぢや生みのお母さんを、わすれておしまひでせう。」

「今の母ちゃんの来ないうちは、よく、母ちゃん何處へいつたのかと聞きましたが、近頃では何とも申しませんもの、子供は罪がありません。可愛がられる人を親だと思つて慕つてゐます。それにこれも嫁の發案ですが、子供の教育貯蓄にも加入しましたし、新たに悴の生命保険もかけました。私のうちも漸く家庭らしく整へかけてきました。かうしてあゝしてと、絶えず生活の設計をたててをります。」

「新婚早々ですのに珍しい方ですね。息子さんもさぞ御満足でせうね。」

「悴も是で僕のうちは、やつと家庭らしくなつた。僕の安息所が出来たといつて喜んでゐます。」

「さうですね、家庭が旦那様にとつて、温かい憩ひの場所でなかつたら、激務の疲れを癒すとこ

ろを、どつかで男は求めます。それが家庭破壊の第一歩といふことになるのでせう。」

「私の家も危ないところで救はれました。悴はいたつて薄給で御座いますのに、よく經濟に氣を配つてくれます。さうかといつて決して榮養に不足するやうなこともいたしません。ない材料で上手にお總菜も作ります。私の家には誠に過ぎた嫁で御座います。これで私も安心して、總べて嫁に引渡しが出来ます。あれなら悴をもちたてて立派に〇〇家の基礎を築き上げてくれます。」

「あなたの方でもお年を少し我慢なすつたお蔭で、本當にいゝお嫁さんでしたね。」

「一度失敗いたしましたから、年なんか問題ではありませんでした。先生のおつしやる通り、みめ形の美しい人より、心がけの美しい人を選ばないと、往々にして失敗します。」

「昔から美人薄命、傾國の美なんて、美人はあまりよく言はれませんでした。失禮な申分ですが、あなたのやうに失敗してから始めて氣がついたといふのでなしに、お嫁さんは始めつから、健康で明朗な人を選ぶことが大事です。」

「私共がいゝ手本です。どうかこれからの方に御参考になりましたら、おつしやつて上げて下さ

ませう。」

「申しませう。」

「それから再婚だからと言つて、無暗矢鱈に恐れたり毛嫌ひしないこと。」

「さうですね。今のお嬢さん達は、處女の純情を尊ぶのあまり、再婚の男子を嫌ふ傾向が多分にあります。それは私にもよくわかります。身も心も清らかな娘さんに、たと年が遅れたといふだけの理由で再婚の男子を話すことは、情に於て忍びない場合が度々あります。けれどもさうしてゐれば、いよ／＼年が過ぎて、立場が悪くなる一方です。せつかく女と生れて來た使命を果さず、老い朽ちてしまふことにもなります。もつと／＼國家意識をさかんにして、事情によつては再婚の男子でもい／＼といふ廣い氣持になつて頂きたいと思ひます。」

「私の悴のやうに意氣地なしで、自分の家内一人より女は知らないといふやうな男子は、今時いたつて尠いやうですから、その邊のことも考へて……。」

「さうです。たと初婚といふ戸籍面だけで、品行の悪るい男子も世間には随分あります。さういふ人に嫁して苦勞する程なら、再婚でも、奥様が亡くなられたとか、病身で去られたとか、事情によつては仕方がないと思ひます。そして一日も早く、人として女として生れて來た、天賦自然の

命に服従することが大事です。」

「私の嫁がい／＼手本です。どうか迷つてゐられる方々にお話して聞かせて上げて下さい。」

「再婚に成功された息子さん、初婚でも再婚の男子に嫁して幸福を得られた娘さん。今日はい／＼お話をゆつくりうかゞはせて頂きまして、大層私の仕事の上にも役立ちます。」

「年が遅くれたからといつて悲觀してゐるひまに、もう少し心を廣く持つて、人も助け、自分も助かる方法を考へないと、益々年の過ぎた女が多くなるばかりですねえ、先生。」

「全くです。今からでもおそくは有りません。」

「今日はすつかりお仕事のお邪魔をしてみました。何のお禮も出來ない代り、じつとしてゐられない感謝の氣持を、お受け頂きたいと存じまして伺ひました次第です。」

「有難う存じます。うれしく頂戴致します。」

「お嫁さんの目慢の出來るお姑さんは、世にもしやはせな果報者といはねばなりません。」

二四 夜叉も菩薩も紙一重

「私は少々事情が混み入つてをりますから、どなたもお出でにならない場所でお話さして頂きたいんですが。」

「では四時には時間が終わりますから、それからなら伺ひませう。」

「執務時間外では誠に恐入ります。」

「かまひませんよ。」

「では買物でも致しまして、お時間までお待ち申上げますから、どうぞお願い致します。」

さういつて、六十近い顔色の悪い、眼鏡をかけたこの婦人は出て行きました。

それから眼のまはりさうな、いそがしい数時間が過ぎました。人々の去つた後の静かな部屋で、ほつとしてゐると、さつきの御婦人が、遠慮ぶかく這入つて來ました。

「先程は失禮いたしました。お疲れのところを恐入ります。」

「どういたしまして、どうぞ御用件をおつしやつて下さい。」

暫く言ひにくさうに、うつむいて考へてゐたこの婦人は、邊りを憚るやうな小聲で語り出しました。

「實は嫁に遣りました娘が、一寸辛抱の出來ない事情が先方にありまして、たゞ今、里に引取つてありますのです。近頃娘はしきりに歸りたいやうな意向が見えますので、親として悩んでをります。」

「どんな御事情なんですか。」

「娘の嫁入り先きと申しますのは、一人息子で御座いまして、お母様とお二人きりなんです。誠に血縁に恵まれない家庭で御座いまして、息子さんが七つの時にお父さんが亡くなられ、それからずつとお母さんは、息子さん一人を大事に育てて來た人なのです。親戚縁者もなく、力になつて相談にのる人もないといふ、いたつて淋しい家庭です。それによく事情を知つた人がいろ／＼なことを聞かせてくれますので、どうしやうかとも躊躇いたしました。結局娘が小學校時代男女組で長く一緒に居り、六年卒業も一緒だつたものですから、まあ幼馴染とでも申しませう。」

か。周囲の反対もおしきり、本人が大變進んで、大丈夫立派にやりぬくと申しますものですか。それにもう年ですから。」

「おいくつでいらつしやいます。」

「二十七で御座います。」

「ぢやお婿さんと、おないどしなんでしょうか。」

「左様で御座います。實は申しおくれましたが、先方は初婚ぢや御座いませんで、一人息子で淋しいからといふので、息子さんが大學へ通つてをります中に、もう貰つて兄妹のやうにしてゐた人があつたのです。」

「その方どうなすつたのです。」

「何でも一年程おいでになつたさうですが、どうもお母様との仲がうまく行かず、御不縁になつたさうです。許婚いひなげとでも申しませうか、御一緒にお暮しだつたさうですが、勿論入籍もしてありません。」

「入籍してなくつても御夫婦生活していらつしやつたのでせう。」

「左様で御座います。人様のお噂ですが、妊娠していらしつたさうで、お子様は生れて間もなく亡くなられたとかです。」

「そお奥様との關係は、すつかり片がついてゐたのでせうね。」

「それからもう二年経つてをりますし、その奥様だつた方も、よそへ嫁入つて幸福に暮してゐるとのことです。」

「今度の問題はどういふことなんです。」

「實はみつともなくて世間に話も出来ないことなのです。娘の姑にあたるお母さんのことですから、世間に耻を暴したくない。出来ればだまつて辛抱しようと、私も娘も随分我慢がまんを致しましたのですが、近頃ではお母様のなさることが益々奇怪きがい千萬で、恐ろしくてとても先方へ置くことは出来なくなりました。」

「それはまたどんなことなんです。」

「晝間は誰が目にも、とてもいゝ優しいお母様なのですが、夜になりますと、申上げ悪くいことですが、つまり一晩中ねむらずにいらつしやるのださうです。ですから二人は話をするこゝも、寝

返りうつことさへも出ない仕末で、気がおけておち／＼眠れないといふのです。日に日に娘が衰弱してゆきますので、私の主人も私も、これはたゞ事ではない、何か様子がありさうだと、娘にいろ／＼問うて見ましたところ、自分でも煩悶はんもんいたしてをりました矢先のこととて、實はお母様がこれ／＼だと打ち明けましたのです。」

「いらつしやつてから、ずつとそんな状態なんですか。」

「左様で御座います。結婚式を挙げましてから、新婚旅行にも出しては下さいませんでしたし、ずつと式場からお母様と三人で、先方の家庭へ這入りましたつきり、娘は早やもう形式の上では嫁ぎまして三ヶ月になります。娘のまゝで、まるで嘘うそのやうなお話で御座います。何處へ行くにもお母様がついて離れず、たつた二人になる機會はほとんど與へられないといふのです。おかしなお話ですが、食事の時でも、お母様がお給仕をなさるし、勤先へ出かける時の身の廻りの世話なども一切娘には手を出させないのださうです。それを娘がお母様より先き、うつかり手を出さうものなら、とても厭いやな顔をなさるさうで、つひ娘も控目ひかめ々々と、自分を殺して出来ない忍耐にんたいを續けてゐる様子です。私の口から申上げるもいかがと存じますが、娘はとても辛抱強い、勝氣な

性分ですから、それに周囲の反對をおしきつて、進んでゆくと申しました手前、今更勤まりませんとは言はれず、とても可哀想で、親としてちつと見てゐられません。」

「それでお引取りになつたのですか。」

「あんまり體が弱つて來ましたので、少し靜養させたいからと申して引取りました。」

「お引取りになつて、どのくらゐになりますか。」

「かれこれ十日程経ちますが、その間一度も先方のお母様から、どうだとも申して來ませんし、息子さんを見舞にもよこしません。」

「お勤めになつてお出でになる會社へでも直接お尋ねになつて、よく息子さんとお話して御覽になつては。」

「それも考へないのぢやありませんが、時刻になると、ちゃんとお母様が會社の近くへお迎へに出でいらつしやるのです。」

・「お電話でお話したら。」

「娘が二三度電話で、本人とはお話したらしいのです。お母様が不賛成で迎へに行くことが出來

ないから、一日も早く歸つて来いと御返事だつたさうです。」

「それで歸りたいとおつしやるのですか。よくわかりました。御夫婦仲はとても圓滿にいつてゐるんですね、あまり滅多めったにない話ですね。」

「息子さんは温厚な純真じゆんしんな、世事にうといお坊様なんです。娘は又其處そこをととても買つてゐるわけなのです。お母様の辛抱も將來のことを考へ、又息子さんの人物にも心惹かれて思ひきれずに、又歸つて努力してみませうといふのですが、親としていかにも不憫で手離せません。思ひあまつて、御相談にうかゞひました。どうしたらよろしいものでせうか。」

「お話の様子では息子さんが、いかにもおやさしい、いゝお方のやうですね。」

「今時珍しい程世間見ずなんださうです。それで娘も、いろ／＼決心して里へ歸つたものの近頃矢も盾たてもたまらず、戻りたい様子です。何といふ因果いんぐわなことせう。」

「そんなにまで決心していらつしやるのなら、いつそお戻しになつては。」

「もし間違ひでも起りはしないかと、そんなことまで考へるものですから。」

「ぢやかうして下さいませんか。一度娘さんにお會ひしたいと思ひますが、御一緒にお出で下さい

ませんか。」

「明日いかゞでせうか、早速連れてうかゞひます。」

翌日約束の時間に、母娘は訪ねて来ました。

「お母さんから詳しいお話はうかゞひしましたが、御主人様と電話でお話がお出来になつたさうですね。」

「はい、三回程話をいたしました。」

「何とおつしやつてゐました。」

「母のことは心配しないで早く歸るやうにと申してゐました。私も歸りたいと思ひます。」

「あなたのお母様は、御健康のことや、いろ／＼御心配なすつてお出でのやうですが、今度お歸りになるにしても、餘程今迄と違つた遣り方でないといけないと思ひますね。」

「先方にをります時は、とても辛くて里へ逃げかへらうと何度決心したかしれません。けれども里へ歸りましたら、矢張りどんな事情があつても女は一旦嫁したら、其所を死に場所ときめてかかるべきだと思ひ當りました。」

「ほんとうによく其所へお氣がおつきになりましたね。」

「世間にはよく出来ない辛抱を餘儀なくされて、悲劇を起した事件が澤山ありますから、親馬鹿かはしませんが、そんな不吉なことまで豫想しますと、私は此際きつぱり取戻したいと思ひますが。」

お母さんは可愛い、娘の身を案じて、かう言つて、悲壯な娘の決意を諷へさうとしましたが、娘さんは、淋しい笑顔をお母さんに向けて、一旦心に誓つた覺悟のほどを語りました。

「里へ歸つて靜かに思案致しましたが、私にも随分行きとどかないことが御座いました。お母様のお氣持にも、もつと同情して上げないといけなかつたとも思ひます。」

「さうですね、若くて御主人に別れ、外に頼りにする御親戚もなく、本當に親一人、子一人の淋しい生活で、この子がこの子かと、母親の全身全靈を打ち込んで、永の年月、脇目もふらずに育てお出でになつたのですから、急にお嫁さんが出來て掌中の玉を奪はれたやうに淋しくお感じになつたんでせう。」

「さうした點を、私はもつとお母様の氣持になつて、自分をなくしてかゝればよかつたと氣がつきました。」

「あなたがそのお氣持になれば、お母様だつて、きつと自分の非を覺ります。急にはいかにいでせうが、御主人のお優しい勞りを頼りにして、今一度遣りなほして見て下さい。様子を見ては、お亡くなりになつたお父様の墓參をすゝめて見たり、御先祖様の法養をすゝめたり、お母様の氣分轉換をはかることに努めて御覽になつてはどうでせう。」

「成程いゝお考へですね。私共はたゞ娘が不憫で迷つてばかりをりますものですから、いゝ分別も湧きませんで。」

かう言つたお母様の顔の愁眉も幾分崩れて來ました。

「なにかお母様のお好きな娛樂はありませんか。」

「お芝居なんかお好きのやうです。」

「ぢやあなたも、私もお芝居は大好きです。お母様お供致しませうといふ調子で、つとめて明るく朗らかに、お母さんの囚はれた氣持を、救つて上げることが大事ですね。それには先づ第一あなたの心構へが出來てゐないと、お母さんの不自然な生活の中へ引込まれますよ。御主人様

とは勿論しつかり結びついてゐるんですから、お母様の氣持のほぐれる迄、あなたは力めて御主人様とは接近しないやうに、他のお買物とか、お臺所の煮たき洗濯とか、さうした役割を受持つて、妻らしいお世話はなるべくお母様にして頂くやう、まあ無理なことではせうが、あなたも相當決心してゐられるやうですから、石の上にも三年といふ諺の通り、やり抜いて下さい。遠からずお母様の迷夢もさめて、あなたの努力が報えられる時が來ます。」

「よくわかりました。主人は私の年のことなど嘸氣にも申しません。そして全く信頼してゐてくれます。母さんのことは僕に免じて堪忍してと、さうと申します。私は其の都度嬉しくて、この方のためなら、この方の側にゐられればどんな苦難にもうちかてると思ふのですが、つひ辛くなる

と、里親にうつかり話したくなりました。でも今度は決心致しました。あの家を離れて私の住むべき世界はないことも、今度里へ歸つて見て始めて解りました。」

かう言つた娘さんの言葉の中には、戦時下日本の強力な建設の響きが込められてゐました。親娘は光明をめざし、來た時とは違つた軽い足どりで歸つて行きました。

それから一年近い月日が流れ去りました。今年もいよく結婚の期節となりました。何から

手をつけていいのか、わからないやうな多忙な日が続きます。今日も漸く仕事が終つて、すつかり人々の去つた後に、靜かにドアが開いて這人つた人があります。小脇に美事な大輪のダリヤの花を抱へて、

「お見わすれでいらつしやいますか。」

「さあ、……思ひ出せませんね。」

「私は一年前の丁度今頃、娘のことで御相談頂いた〇〇と申すものですが。」

「失禮ですが、どうも思ひ出せません。」

するとその老婦人は、私の記憶をよび起させるやうな、特殊な事情の二三を話しました。私はすぐに思ひ當りました。

「わかりました。あれから娘さんどうなさいました。ちよつと變つていらつしやいましたので印象されてゐます。思ひ出しましたよ。」

「御親切なお言葉に力を得まして、娘も一生懸命勉めてみました。随分泣きましたが、結局報いられました。」

「それはまあお目度り御座いました。大層早いぢやありませんか。」

「でも娘は申してゐます。十年も年をとつたやうだと。あれから亡くれたお父様のお石碑を建て
るやら、其の他にもいろいろとお母様の氣分の變るやうにとつとめましたので、お佛様のお加護
とでも申しませうか。」

「さうでしたか。で赤ちゃんはどうです。」

「お喜び下さい、來春生れる豫定で御座います。お母さんの病的な御様子も追々うすれて來まし
て、近頃では安心して家をあげ、墓参りに出掛けたりする程になりました。」

「それは何よりです。それで先方のお母さんもやつと救はれたといふものです。娘さんもどんな
にかお辛かつたでせうが、お母さんだつて苦しかつたでせうよ。娘さんは結婚相談の上に立派な
美談をのこして下さいました。私こそお禮を申し上げなければなりません。」

「疾うにお禮にうかゞはなければと存じながら、何かいゝお土産を持参して、喜んで頂きたいと
存じてゐますうちに、娘も妊娠いたしましたので、それを土産に今日は伺ひました。」

「有難う御座います。何よりのお土産です。」

「いづれ赤ん坊と一緒に、娘も連れてまゐります。これは私の處の庭に咲きましたダリヤで、珍
しくも御座いせんが、控室にでもお挿し下さいませ。」

母親はよろこんで歸りました。

赤、黄、紫と濃艶な花の一束を、花瓶に入れてじつと眺めてゐると、愛の一念に燃えてすべて
の悩みを克復した、神々しい娘さんの顔、聽て母となるべき歡喜に満ちあふれた顔、目を細めて
ほゝゑんでゐる顔、いろいろな喜びの表情の顔がくるくると、うかんで消え、消えては浮びま
す。

戦場の勇士にも負けない、この娘さんの手柄を、何かの意味で現さずにはゐられない感激で、
私はこのつたない一文を綴りました。

二五 再婚に悦ぶ人々

「今日はお客様を連れて参りました。其の後は太へん暫く御無沙汰申上げました。」

「おや、いらつしやいませ。皆さん御元氣でいらつしやいますか。」

「私の所はお蔭様で皆大元氣で暮してゐます。又先生、暮に一人生れる豫定です。」

「それはく、何よりですね。」

「あんまり早速で、お恥かしい次第です。」

「そんなことありません、御圓滿なしるしでおめでたう存じます。」

「いや恐入りました。それでこの方はねえ先生、私と極く仲のいい、眞面目ないい人なんです、今年二月、奥様になくなられて困つてゐるんです。」

「それはお氣の毒様なことですね。」

「子供が三人ゐます。十七の長男、十四の長女、十一の次女と。」

四十過ぎた、いかにも實直さうなこの男は、靜かな口調で語り出しました。

「實は家内はお産でなくなりました。次女を産んでから、十年も子供が御座いませんで、十一年目に妊娠いたしました。どういふものか、今までにないお産が重く、醫者騒ぎしてやつと生れました。それからつとはつきりしないで、子供と一緒にいけなくなつてしまひました。」

「他の御病氣と違つて、お産でおなくなりになつたのですから、どんなにか残念でいらつしやいましたでせう。」

「ですから、この方は奥様に義理をたてて、今迄不自由を我慢して來たわけです。いかんせん、近頃のやうに買物は面倒になる、隣組とおつき合ひ、子供は學校へ出てしまふ、家は年中留守といふのでは、世間さんの迷惑も考へなくてはなりませんから、私がすゝめてお連れしたわけです。」

「よく解りました。」

「なにせ私が、こちら様のお世話になつて、いゝ家内をお世話して頂き、助けて頂いたのですから、一人でも多く困つてゐる人に知らせて喜ばせて上げたい。これが私の何よりの御恩がへしと

思つてゐます。さういふわけでお連れした次第ですから、どうか先生、私の家内のやうないゝ人をお世話下さい。」

「かしこまりました。」

「いやー私は、こちら様より年もとつてをりますし、不細工な男で、子供も大きいのですから、滅多相手はないだらうと思ひます。親類や懇意な人から二三お話も頂いたのですが、どうも子供が三人もゐてはとか、いや何でとか、うまく纏りませんでした。」

「狭い範囲ぢや駄目ですよ。私の家内を見て下さい。自慢ぢやありませんが、子供の五人もある僕の所へ無條件で飛込んで来たんですからね。私は此所で御紹介頂いて、よかつたら僕の家庭を見て下さい。そして僕の腕白子供をよく御覧下すつて、成程これだけの子供を残されて、奥様にいかれた氣の毒な男、氣の毒な子供、よし一つ世話してやらうといふ決心がついたら来て下さい。出来さうもないと懸念されたら遠慮なく斷つて下さい。とかういふことで話が進んだんですからね。ねえ先生、始めから隠すところなく、さつくばらんに打明けましたのが成功したわけです。」

「あなたは、をりよく此所で、お互に捜し求めてゐた人に邂逅したわけでしたね。」

「だから僕は大いに廣く求めると、皆さんに勧めてゐるんです。全く自分の家内を褒めるぢやありませんが、よくやつて呉れますよ。なにせ十三を頭に五人ですからね。おまけに腕白盛りの男野郎ばかりときてゐませう。話を持ちかけられた女は、大概喫驚してまかり下つてしまいますよ。それでいよく困つてしまつて親子心中でもするより方法はないと、突詰めた考へにまで追込められましたところへ、ふとこちらのことを新聞で拜見して、お願ひしたわけでした。間もなく今の家内を紹介して頂いて、とん／＼と話がきまつたのです。どうか先生、縁を結ぶことも大事ですが、結ばれた人達がいかに幸福な家庭を築いてゐるかといふことも見廻つてやつて下さい。」

「それはもう考へないぢやありませんが、大勢子供さんが居りますと、さう順調にいつてゐる方ばかりありません。偶には家庭争議を起したり、御病氣になつたりする方もありますので、さうした方には一緒に心配して、どうか仕合せにして差上げたいと、時間の都合をつけても訪問してゐます。つひ幸福に暮していらつしやる方は安心してゐますので、お訪ねする機会もないわけです。」

「さうお骨の折れる役割ばかりでなしに、時には私のやうな家庭も見て下すつて、大いに家内を

褒めてやつて下さい。又私の子供がすっかりお母さんになつてしまつて、殊に一番小さい坊主なんかお母さんでなければ夜も日も明けない始末で、一も母さん、二も母さん、腰の根にからみ附いて一日中離れませんよ。此の間も大笑ひしたことでしたがお風呂へ行つて、あんまり子供達にばかり夢中になつて、自分の洗ふことをすっかり忘れて石鹼も流さずに出て来たさうですよ。まあ朝三人の子供を學校へ出してやつて、後片つけ洗濯、それがすむと、小さい坊主をひつちよつて、五つの坊主の手を引いて買物です。まあ寸暇ないでせうな。私は健康のことを心配してゐますが、本人一向平氣で、母になるとこんな不思議な力が出るんですね。産んだことも育てたこともない私に、大勢の子供の世話が出来るかしらと、結婚前氣遣つたことは杞憂に過ぎなかつたといつて、今では大いに自信を持つて遣つてゐますよ。その代り僕は、生活費に不自由は絶對させません。大いに働いて家内の運轉を圓滑ならしめてゐます、其の點僕も褒めて頂きたいと思つてゐます。決心すると女は男より強いところがあります。かういふ次第で、僕は女房に感謝して働ける幸せ者です。二度目だ二度目だといつて、無暗に不安がつたり、恐れたりする女に、どうか僕の女房の話をしてやつて下さう。」

「これでは、まるで〇〇さんの奥様のお自慢話を聞かされてゐるやうですね。」

「ですから先生、この方にもどうかいゝ人をお世話して上げて下さい。」

「さうですね、精々お探し致しませう。」

「どうか先生むさくるしい所ですが、一度見に来て下さい。家内もしよつちうお噂は申上げてゐますが、なにせ大きなお腹を抱へて、大勢の野郎どもの世話で、目をまはしてゐますから、思ひながら失禮してゐます。」

「どうかお體をお大事にと、くれぐれもよろしくおつしやつて下さい。」

再婚に大成功をした〇〇さんは、お友達のお奥さんのことを懇々と私に頼んで、歸つて行きました。

二六 入籍のこと

「私は〇〇に住んでをります〇〇と申す者で御座いますが、今日は嫁にやりました娘の入籍のこととで、御相談にうかゞひました。」

「入籍のお手續なら、區役所へいらつしやいませ。」

「手續のことでは御座いません。」

「どんなことなんです。」

「娘は昨年暮、知人の世話で或る會社に勤めめてゐる人にやりましたのです。ところがもうかれこれ一年近くにもなりますのに、未だ入籍をしてくれないのです。」

「先方へ、どん／＼急きたてて御覽なさい。」

「随分此方からも申しましたし、又仲人からもかなり強硬に掛合つても貰つたのですが、其の都度曖昧に言葉を濁して逃げてしまふのです。」

「それは又どういふわけなんです。」

「どうも、手前共にもさつぱり合點がまわりません。」

「御夫婦仲はどうなんです。」

「極く上等とはまわりませんが、大して悪くもなくやつてをります。」

「お舅さんもいらつしやるんですか。」

「舅姑二人揃つてゐて、二十七になつた連合の妹もゐます。」

「皆さん御一緒のお暮しですか。」

「左様で御座います。」

「お姑さんや、お義妹さんとも、仲よくやつてお出でになるんでせう。」

「先方ではあまり氣に入つてもゐない様子ですが、娘としては一生懸命盡してゐるらしいんです。」

「何か入籍を拒む心當りはありませんか。」

「不束な娘ですが、女學校も出しましたし、裁縫も二年程稽古させ、身體其の他缺點はないつも

りです。」

「先方は初婚でせうね。」

「初婚のつもりで遣りましたのです。又仲人も初婚だといふことだつたのですが、後でよく娘に聞きますと、實は一寸貰つたことがあつたが、二三ヶ月で別れたと本人が言つたさうです。」

「どうしてそれを、先方では初婚だなんて欺いたのです。」

「ちよつとだから、それに入籍もしなかつたから、初婚と同じだと言つたさうです。」

「暴言にも程がありますね。入籍してもしなくても、一旦結婚式を擧げて、一日でも同棲したら立派な御夫婦ぢやありませんか。」

「どうも最初からおかしかつたんです。」

「仲人さんにも手落ちがありますが、あなたの方でもよくお調べにならなかつたんでせう。」

「總べて仲人を信頼して安心してゐました。」

「よくさう言つて、失敗した方が相談にお出でになります。仲人を信頼することも大事ですが、御自身で出来るだけ調査することも、それ以上大事なことです。いろいろ伺つてゐるうちにたゞ

曖昧に入籍を拒む先方の理由も、少しは想像がつかます。先の奥様の離婚によつても察しられる通り、後で氣まづいことが起つた場合を豫想してと見て差支へないでせう。もしさうだとしたら、何といふ誠意のない、不道徳な行爲でせう。私は結婚式を擧げると同時に、先づ入籍の手續きをとるべきだと思ひます。誰でも結婚と同時に、親戚知人に披露の招待をすることは忘れませんけれども、私は結婚を致しましたといつて、國家に披露する義務を疎かにする人は、尠くないと思ひます。入籍するといふことは國家に對して披露することです。入籍の手續の終らない間は、國家は夫婦と認めないのでから。結婚式に次ぐ大事なことであります。あなたの娘さんも、もつとしつかりしなくてはいけませんね。夫から先の奥様との經緯を打明けられた時、夫の悖德行爲に抗議すべきです。それをだまつてゐるなんてことはありません。そんな辛抱は決して一人を幸福にする役には立ちません。親と雖も、夫と雖も、人道に外れたことには、十分妻の立場を主張すべきだと私は思ひます。さうしてお互の非を改めてこそ、眞の夫婦といふものです。伺へば伺ふ程、先方に誠意のないことが解りました。」

「おつしやられると、成程と思はれる節々が思ひあたります。」

「一年も入籍手續を怠つて、子供でも産れたらどうする積りでせう。」
 「どうも娘の體のことも心配になりました、手前共では急立てせきたたててゐる次第なんです。」
 「そんな手緩いことおつしやつてゐては駄目です。一日も早く入籍の手續きをお取りなさい。もしどうしても先方で聞入れなかつた場合は、外に非常手段もありますが、成べくなら娘さんから、夫に靜かに説くのが一番いゝと思はれますから、よく娘さんをお父様からお父様から言ひ聞かせてお上げなさい。先には手強い両親、妹さんとなかく、大變でせうが、重大な場合ですからしつかりする様に。それには先づ、あなたもつと強くなつて、そんな人のいゝ顔をしてゐると、娘さんの御亭主に入籍してないから初婚も同然ですなんて、又罪を重ねさせることになります。」
 漸く決心ついたらしいこの父親は、可愛い娘の將來のためしつかり掛け合ひますといつて歸つて行きました。

(完)

昭和十八年二月五日印刷
 昭和十八年二月十一日發行

〔三、〇〇〇部〕

Ⓢ

定價 二圓
 送料 十五錢

結婚相談所員の手記
 (認承協文出)
 (號 790030 あ)



著 者 木村 よし の
 發 行 者 塩 田 民 治
 印 刷 者 田 村 良 知
 東京市下谷區上野櫻木町四八
 東京市小石川區白山御殿町一八
 會員番號 第二〇六號

發行所

株式 興 亞 書 院
 東京市下谷區上野櫻木町四八

振替東京一六、三〇六
 會員番號第二〇五七號

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

近刊豫告 (四月中旬發賣)

東京市結婚相談所長 田中孝子女史著

隨筆 桃夭

B六判・上製・美本
定價二圓・送料十五錢

著者が多年結婚相談事業に盡粹せられる傍ら、折に觸れてもさ
れたる數多の文藻中より、その粹を集めたるもの。

一、結婚について 二、生活の諸相 三、隨感 四、身邊雜稿
五、人事問答の諸項の下に、隨筆數十篇を收む。

多年海外に留學しつつある間も、常に日本婦徳の涵養に努められ
たといふ著者の人となりを偲ばしめる、滋味深き好讀物。

株式會社 興亞書院 版

相良谿介著

創作 青年教師

B六判 三二〇頁 定價一圓八十錢 送料十五錢

新進作家としての著者が、最初に世に問ふ書下し長篇小説。

明朗健全なる青年教師の子供に對する眞摯な愛情を描き、新

らしい教師としての在り方、戦時に於ける人々の思索の在り

方に就いて、一提示を企圖せる新創作。

青年男女・國民學校教職員・一般父兄諸氏に推奨す。

最新刊

株式會社 興亞書院 版

東京日日新聞社
東亞調査會主事 松本鎗吉著

支那問題の解剖

B六判三五〇頁 定價二圓 送料十六錢

新刊

支那問題の解決は大東亞戰爭の終結を意味す、とは識者一般の見解、以て支那問題の重大性を知るべし。著者は東日・大毎特派員として支那各地に駐在し、實地に支那問題の研究に没頭すること三十年、本書は其の結晶なり、支那事變の本質を詳説し、其の他重要支那問題に對し辛辣なるメスを加へて餘蘊なし。

株式會社 興亞書院 版





興亞書院

規格B6
傳 ¥2.00

1952
興亞書院